Japanese Journal of Applied Psychology
2011, Vol. 37, No. 1, 44-76

日本応用心理学会主催　公開シンポジウム

なぜ若者は恋をしないのか？

—応用心理学からみた恋愛—

企　　画　田之内厚三　（麻布大学教授）
司　　会　大坊郁夫　（大阪大学教授）
話題提供者　谷口淳一　（帝塚山大学准教授）
川名好裕　（立正大学教授）
長谷川眞理子（総合研究大学院大学教授）

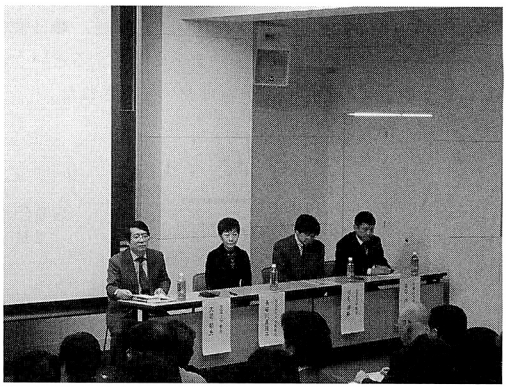
このシンポジウムは，平成22年11月13日(土) 午後1時～午後3時30分に，東京富士大学で開催されました。

■理事長挨拶と企画主旨の説明

総合司会者・木村友昭（エム・オー・エー健康科学センター主任研究員）：時間がまいりましたので，ただいまより日本応用心理学会主催の公開シンポジウム「なぜ若者は恋をしないのか？ —応用心理学からみた恋愛—」を開会いたします。本日はたくさんのご参加をいただき，ありがとうございます。それでは，最初に，日本応用心理学会の理事長である帝塚山大学の森下より，皆様にご挨拶がございます。よろしくお願いいたします。

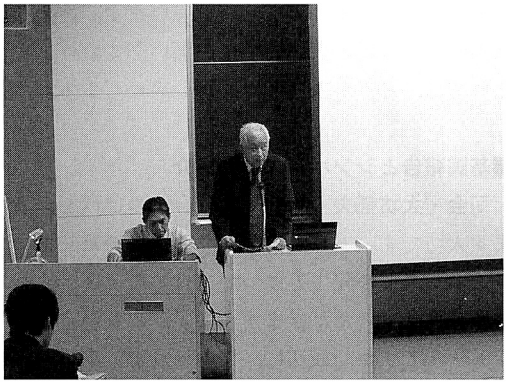
日本応用心理学会理事長・森下高治（帝塚山大学）：皆様，こんにちは。理事長を仰せつかっております帝塚山大学の森下でございます。本日は大変お忙しい中，そして，次第に秋が深まる今日，東京富士大学にお越しいただきましてありがとうございます。一般の皆様，学生の皆さん，大学院の皆様，そして，応用心理学会の会員の皆様，誠にありがとうございます。先ほどご案内がありましたように，「なぜ若者は恋をしないのか？」というタイトルで，今回は公開シンポジウムを開催させていただきます。

私の専門は，職業行動，職業問題ですが，いまの世の中は，女性のほうがこれまでは男性の仕事だと考えられていた職業に就くとか，あるいは男性のほうが女性の職業に就くといった時代であります。この2008年の8月に讀賣新聞に草食系男性の問題が



司会と話題提供者・一同

会場の参加者



森下理事長

登場して，2009年にはその言葉が流行語大賞のトップ10に取り上げられたわけであります。そういう意味では，従来，異性というか，ヘテロが明確であった社会が，ホモの時代に移ってきていて，いまは，男性の役割あるいは女性の役割の垣根がすごく低くなってきています。

本日お招きしていますシンポジストの方々は非常に著名な先生方でございますが，そのお一人の長谷川眞理子先生は，皆様よくご存知だと思います。先生は，国内外のメディアでもご活躍されている人類学者ですが，先生からは「ヒトの配偶者選択と恋愛」といったテーマで話題提供していただきます。それから，谷口先生は，私どもの大学の仲間でして，新進気鋭の研究者であります。関西のほうでは，以前，2月14日のバレンタイン・デーに，女性は男性からの恋を射止められるかという話題で，マスコミに取り上げられたりして，いま非常に売れている，ヒットしている先生です。そして，川名先生には，恋愛の自己呈示といった内容のお話をしていただきます。いまの若者は，男性も女性も自分を表現する力が弱いといいますか，そのあたりの事情を「異性の心の理解」というテーマの中で詳しく解説してくださいます。

さて，本日の会場，東京富士大学のメディアホールは，浮谷先生のお計らいでお借りすることができました。感謝申し上げます。また，今日の企画をしていただきました麻布大学の田之内先生はじめ企画委員会の委員の先生方にもお礼申し上げます。そして最後に，本日の司会の労をとっていただきます大坊先生，どうぞよろしくお願いいたします。

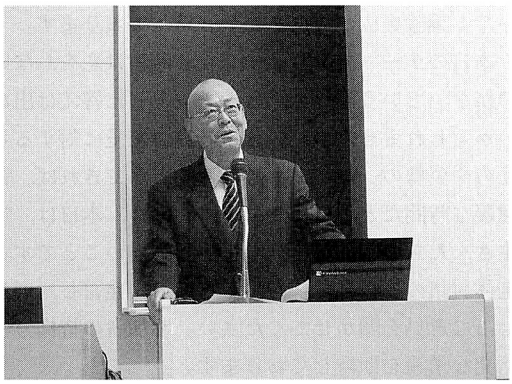
先ほど申し上げましたように，ヘテロからホモの時代へと移り変わっている今日，「男性だから」とか「女性だから」とかいった垣根がなくなってきています。そのあたりの現況について，3人の先生方がどのような話題提供をしていただけるのか，楽しみにして，皆様とともに聴かせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

木村：森下理事長，有難うございました。続きまして，今回の公開シンポジウム開催にあたりまして，その企画趣旨を企画委員長である田之内より説明がございます。田之内先生，よろしくお願いします。

企画委員会委員長・田之内厚三（麻布大学）：それでは，今回の公開シンポジウムの企画主旨について，ご説明したいと思います。

最近は，若者の恋愛行動や恋愛スタイルが変化しているといわれております。恋愛や結婚に後ろ向きというか，逃げ腰の若者が増えてきているというわけです。このため，結婚が遅くなり，晩婚化も取りざたされています。一方で，30～40代の婚活も盛んです。こうした現象がなぜ生じているのかを応用心理学の観点から，また進化生物学の立場から，その心理と行動について考えてみようというのが，今回のシンポジウムの大きな目的であります。

恋は基本的に，自分の中にある「何か欠けているもの」を埋めたいという欲求が，その主なエネルギー源になっています。恋は，心が満たされない状態から生まれるケースが多いというわけです。たとえば，お金がなくて貧しい生活を送っているとか，病気になっているとか，戦争で命が危ないとか，そういうとき，そこから抜け出したいという欲求が恋のエネルギー源になるわけです。心理学で有名なつり橋実験でも，揺れる橋での緊張感，ストレスを共



企画委員会委員長・田之内

有すると，それが恋愛感情に発展する場合が多い，といわれています。したがって，悩みやストレスをたくさん抱えている人ほど，多くの恋を経験する，ということになります。昔から「障害の多い恋ほど，燃え上がる」といわれています。そう考えると，いまの日本の若者が恋をしないという傾向も，なんとなくわかるような気がします。「いまのところ，自分はそんなに大きな不満もない。まあ幸せなほうかな」と想っている人にとって，わざわざ恋をして，面倒な関係，やっかいな状況に陥るのはゴメンだというのも，当然といえば当然のことなのかもしれません。ある程度幸せないまの時代に，お互いが激しくぶつかり合うような，そんな情熱的な恋はイマ風ではないのかもしれません。もちろん，それだけが恋をしない理由にはなりませんが，いまの日本の若者たちが，それほど深刻な心の欠乏状態に陥っていないということと，恋をしないということの間には，結構密接な関係がありそうな気がいたします。

そこで，今回のシンポジウムでは，恋愛がうまくいく人といかない人との違いはどこにあるのか，相手のどういったところに心を惹かれるのか，あるいは，嫉妬心や浮気心，性的な欲求などは，恋愛にどう影響するのか，といった大変興味深い話題が紹介されると思います。そこで，そうした知見が若者の恋愛嫌いを軌道修正することができるかどうか，その可能性を皆様に問うてみようというのが，目的の1つであります。さらに，恋愛について語る場合，基本的なこととして，動物行動学や進化論的な視点からの配偶者選択に関する知見との照合も必要であります。そこで，進化生物学の観点からも，ヒトが進化していく過程の中での配偶者選択について話題提供していただき，そこから現代の恋愛と結婚についても議論を広げていきたいと考えております。

本日のテーマであります「なぜ若者は恋をしないのか？」という問いに，はっきりとした答えは出ないかもしれませんが，いまの若者の恋愛に対する考え方や姿勢の一端にでも触れることができれば，有意義な時間だと思っております。幸い，本日は，学生さんたちの参加が目立ちます。有難いことです。全体討議のときは，皆さんもどんどん発言し，いろいろな意見を聞かせてください。参加者の皆様方の活発な議論を期待しております。

木村：有難うございました。それでは，これより公開シンポジウムに入りたいと思います。司会進行は大阪大学教授の大坊先生にお願いしております。それでは，どうかよろしくお願いいたします。

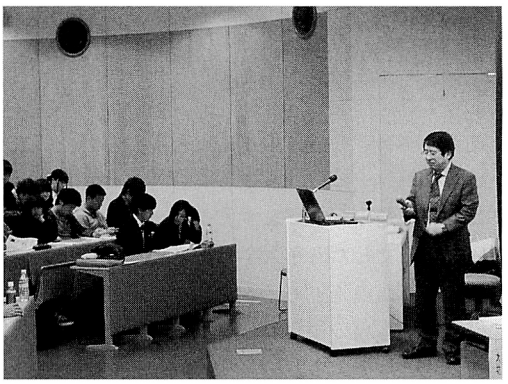
■基調報告とシンポジストの紹介

司会・大坊郁夫（大阪大学）：今日の進行を担当します大坊です。どうかよろしくお願いいたします。シンポジストの先生方についてはのちほど，改めてご紹介させていただきます。まず，これからのスケジュールですが，最初に，私のほうで，本日のテーマに関連する統計データをいくつか用意しましたので，少しお話した後に，各シンポジストの先生方に25分程度を目安に話題提供していただきたいと思います。そして，その後に，皆様方からの質問やご意見をいただきます。その後に，各シンポジストの先生からのお答えをいただきます。

●恋愛観・結婚観に関する統計データの推移

さて，私のほうで用意しました統計的なデータからまずお話したいのですが，先ほど，田之内先生からも最近の若者の恋愛傾向についてお話がありましたが，近年，初婚年齢，それから出産時の年齢が次第に高齢化しております（図1）。たとえば，2006年で見ると，初婚年齢は夫が30歳，妻が28歳です。年々上がってきております。また，出産したときの母親の平均年齢も2006年で29歳と，晩産化が進んでいます。

それから，婚姻率自体も1970年代前半に比べると，最近はその半分ほどに落ち込んでいます（図2）。といっても，ここ40年ぐらいはわりと緩やかな下がり方ですが，反対に，初婚年齢は急激に高齢



司会・大坊

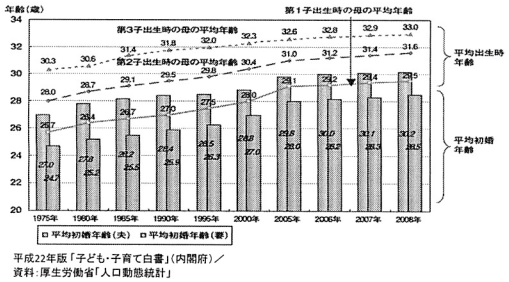


図1　平均初婚年齢と母親の平均出生時年齢の年次推移

婚姻率は，1970年代前半と比べると半分近くまで落ち込んでいる。また，25〜29歳の未婚率(2005年)は，男性で71.4%，女性で59.0%。

日本人の平均初婚年齢は，2006年で，夫が30.0歳(対前年比0.2歳上昇)，妻が28.2歳(同0.2歳上昇)と上昇傾向を続けており，晩婚化が進行している。また，出生したときの母親の平均年齢は，2006年で，第1子が29.2歳，第2子が31.2歳，第3子が32.8歳となっており，晩産化も進行している。高年齢になると，出産を控える傾向にあることから，晩婚化や晩産化は少子化の原因となる。

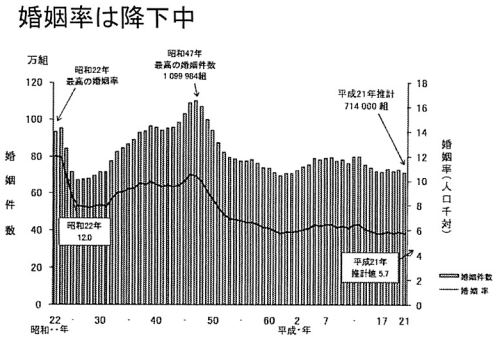


図2　婚姻件数，婚姻率の年次推移

厚生労働省:「人口動態統計の年間推計」による。

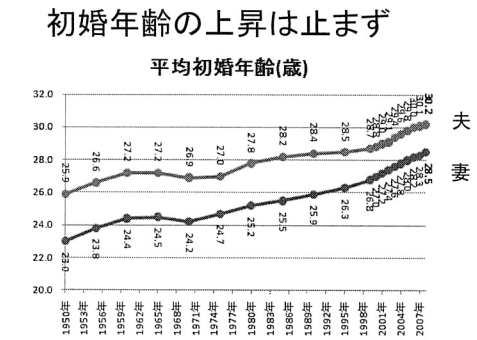


図3　平均初婚年齢の推移

2008年においては，夫は30.2歳・妻は28.5歳が平均初婚年齢。

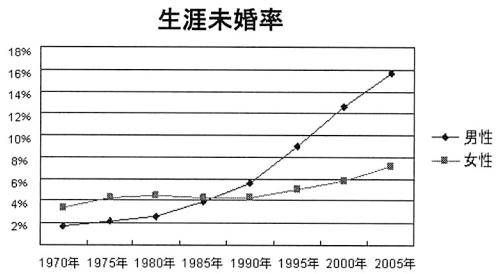


図4　生涯未婚率の変遷

国立社会保障・人口問題研究所の「人口統計資料集(2009年)」によると，生涯未婚率は男性が15.96%，女性は7.25%。特に男性は10年前の調査と比べ約7ポイントも上昇している。

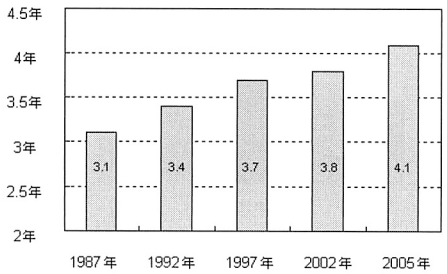


図5　恋愛結婚の平均交際期間

対象:男性初婚・女性初婚同士
国立社会保障・人口問題研究所
第13回　出生動向基本調査(2005年)

化していることがわかります(図3)。また，生涯未婚率を見ても，女性のほうは緩やかな上昇ですが，男性では急激に上がってきています(図4)。今後についても，近年の動向からすると，さらに晩婚化が進むと予想されます。それから，図5は，結婚に至る場合の平均交際期間を示したものです。これを見て，結婚に至るまでの期間は案外に「長い」と感じました。結婚に至るかどうかは別にするならば，つまり，よりカジュアルな関係としての交際期間は，もっと短いと思います。この結果によりますと，2005年では，お付き合いの期間が4.1年と，それ以前に比べて次第に長くなってきています。1987年で3年ですから，1年も長くなっています。時代が新しくなるにつれ，結婚になかなか踏み切れていない，ということがわかります。

次に，これは最近行われたネットでの調査結果です(図6)。現在の大学生と以前の大学生という少し

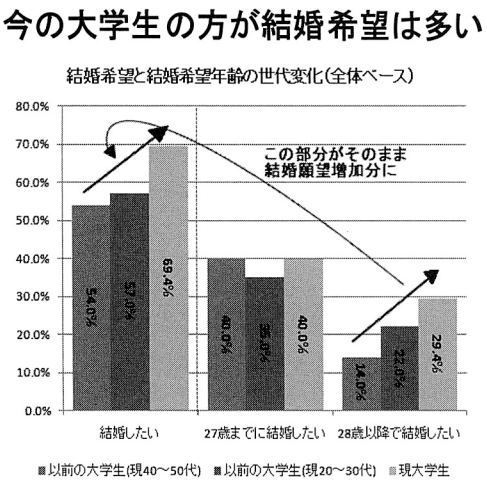


図6　結婚希望の世代比較

2008年11月12日から14日にかけてインターネットでの調査．現大学生は18～24歳の大学・短大生（1,000人），以前の大学生は現在20～39歳の人が300人・現在40～59歳の人が300人。男女比は現行大学生が57対43，以前の大学生はいずれも1対1
http://www.garbagenews.net/archives/1217917.html

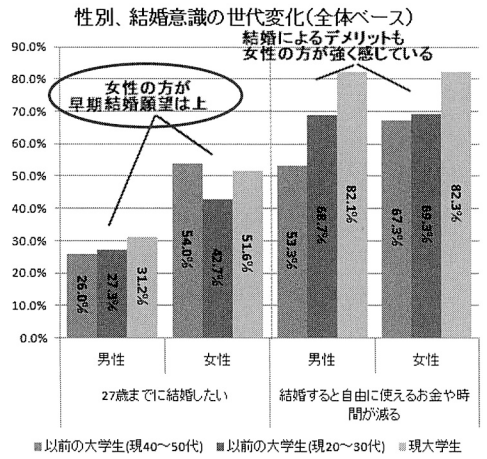


図7　結婚意識の男女，世代比較

妙な分け方をしてはいるのですが，結婚希望という観点から見ると，左端の「結婚したい」という希望率は上がっております。しかし，上がってはいますが，これまでのデータで見てきたように，実態は必ずしも単純にそうみなすことはできないと思います。さらに，早期に結婚したいという願望は，一般的に男性より女性が高いようです。さらに，結婚すると自由に使えるお金や時間が減るということも，

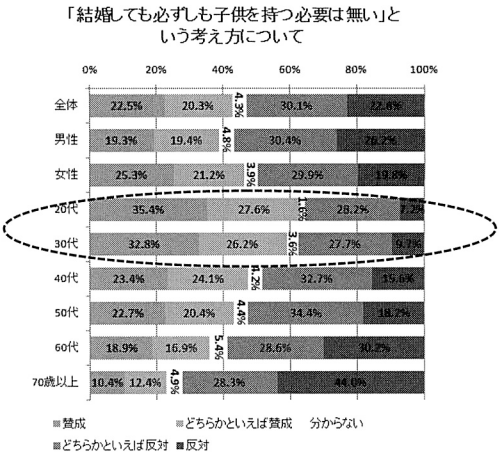


図8　結婚すると子どもを持たなければならないか？

内閣府は2009年12月7日，男女共同参画社会に関する世論調査の結果を発表した。それによると，20代・30代の約6割は「結婚しても必ずしも子供を持つ必要はない」という考えに賛成の意を示している。

実はこれも結構パラレルな特徴になっています（図7）。このあたりに，「なぜ結婚になかなか踏み切らないのか」「なぜ結婚が遅くなっているのか」ということのヒントが隠されているのではないかと思います。それと，図8では，20代と30代のところにマークが付いていますが，「結婚しても，必ずしも子供を持つ必要はない」という考え方は，この年代で6割を超えています。つまり，“結婚イコール子孫を残す”ということについては，現代ではかなり話が違ってきているということであります。結婚することは，あくまで「自分たち」の新たな生活の創造であり，家族の歴史性，世代の継承などとの考えは希薄であり，当事者の今の生活のしかたのヴァリエーション，合理化などという個人的なレベルでのとらえ方に終始しているようにみなすことができます。

このように，結婚に至る準備期間の長期化，動機の希薄化などがみられています。同時に，これらの調査データに出てきていないこととして，カジュアルな恋愛関係が短期的で，かつ，その関係が変遷しがちであることも近年の特徴としてはあるようです。この背景には，「一人」でいることの気安さ，便利さ，「他人」による拘束を避けたい，さらには，親密な関係を持つことによって相手から影響されることを必ずしも好まない，個人主義的な傾向，慎重さ，

が作用しているようにも考えられます。

このような背景に何があるのか，また，今後の恋愛関係はどうなっていくのか，考えていくことにいたしましょう。

●話題提供者の紹介

それでは，本日のシンポジストの先生方をご紹介させていただきます。

最初にお話をしていただく谷口淳一先生は，帝塚山大学心理福祉学部の准教授をされております。あとでご本人からもコメントがあると思いますが，2010年，ナツメ社から『史上最強図解　よくわかる恋愛心理学』という，今回のシンポジウムにはぴったりの非常に読みやすい本を共著で出版されています。その本の中のおもしろいお話も，これから出てくるかと思います。恋愛というのはとりわけプライベートなことで，そこでいろいろと悩みがある。その悩みはなかなか他人と共有できないことがあって，閉じている部分があります。こうした見えない部分を研究していると，いろいろなデータが集積されてきて，ある程度閉じている部分の特徴がわかってきます。それを他人と共有することで，どうすればもっとうまく魅力的な恋愛ができて，豊かな人生が開けるかということにつながってくるのです。見方を変えると，恋愛メカニズムのさまざまなルールがわかることによって，恋愛のトレーニングが可能ではないか，ということです。そうしたお話がうかがえるかと思います。

次の川名好裕先生は，立正大学におられます。魅力心理学や社会的影響の問題を研究されておられます。本日は「恋愛の進展」というテーマで，異性のこころの理解についてお話をしていただきます。異性というのは，お互いにとって，やっぱり一種の異文化なわけです。異文化間交流をしているのです。この異性を理解するということは，いわば，相互のコミュニケーションをどのようにとるか，ということでもあります。幅広い意味でのコミュニケーションです。それから，心理的要因の中でも，特に親密性やコミットメントの問題などについても話題提供していただく予定です。

最後に，長谷川眞理子先生は総合研究大学院大学におられます。日本進化学会の前会長で，現在は日本人間行動進化学会の会長をされておられます。これまで多くの著書を出版されています。私が最初に読ませていただいたのは，1992年の『クジャクの雄はなぜ美しい？』であります。これはとても興味深く読ませていただきました。私も大学の講義で，対人魅力とか，恋愛の話をしておりますが，そこで，先生が書かれているデータやコメントを使わせていただいております。なお，このご著書，2005年にはその増補改訂版が出ております。先生は非常にたくさんの著書を出されておられますので，ご存知の方も多いかと思います。長谷川先生には「進化生物学から見たヒトの配偶者選択と恋愛」ということで話題提供をしていただきます。人間について考える場合には，必ず，人間も含む動物の配偶者選択とその行動との照合で相互の研究が展開する，といったお話がうかがえると思っております。

それでは，ご紹介の順番でお話をいただきたいと思います。

■話題提供者の報告内容

恋がうまくいく方法を心理学は教えてくれるのか？

谷口淳一

（帝塚山大学准教授）

●はじめに

トップバッターを務めます帝塚山大学の谷口と申します，よろしくお願いします。いただいた時間は30分ですが，皆さんにお配りした資料のスライドのほうは全部で48枚もあるので，時間内には終わりそうにありません。それで，様子をみながらちょっと飛ばしていこうかなと思っております。本日は学生さんが結構多いですね。私も普段から，授

話題提供者・谷口

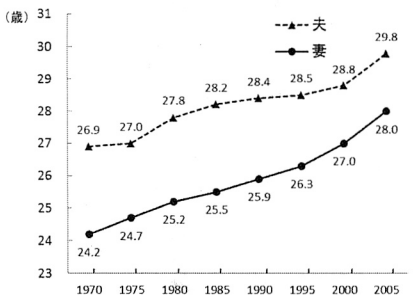
業で恋愛の話をしますが，こういう話というのは，実は皆さんのほうがよく知っていたりしまして，恋愛に関しては，皆さん一人一人が専門家だったりするわけです。何か一言，二言，皆さんにも自分なりの理論みたいなものがあると思います。それで，私の話も，ちょっと批判的に聞いてもらって結構です。「あぁー，あの人はあんなことをいっているが，本当にそうなのかな？」という目線で聞いてもらえればありがたいと思います。

●初婚年齢と未婚率の変化およびその原因

本日のタイトルは，「恋がうまくいく方法を心理学は教えてくれるのか？」ということで，それをどうまとめるか，実は難しいことなのですが，ちょっとチャレンジしてみたいと思います。先ほど大坊先生からもお話がありましたように，最近の若い人たちが結婚しなくなったということは，いろいろなメディアでも取り上げられています。いくつかのデータを見ましても，確かに，こうしたことが言えるのかなと思います。この図1, 2のグラフでもわかるように，平均初婚年齢は非常に上がってきておりますし，20～34歳の未婚率も非常に高くなってきております。この意味で，確かに晩婚化現象も進んでおりまして，結婚しない人は結構多いのかなと思っております。ちょっと余談ですが，私もずっと結婚していませんでしたので，こういう話をすると「それはお前のことだろう」とよくいわれましたが，実は，今年，何とか結婚できまして，やっと違う立場からモノが言えるようになりました（笑い）。

若者は恋をしなくなったのか？

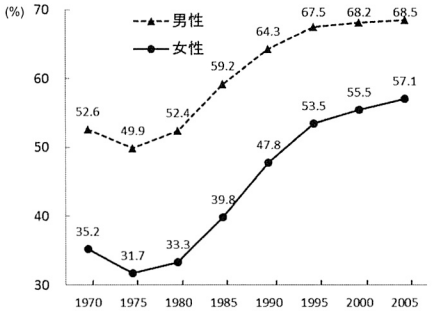
■結婚しなくなったのは事実



平均初婚年齢の変化（厚生労働省, 2007）

金政・相馬・谷口「図解よくわかる恋愛心理学」より作成

図1



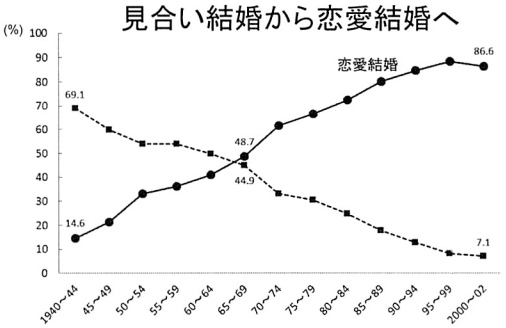
20～34歳の男女の未婚率の変化（総務省, 2005）

金政・相馬・谷口「図解よくわかる恋愛心理学」より作成

図2

それで，結婚が遅くなる原因ですが，その一例として，よく結婚形態の変化ということがいわれております。図3のグラフをご覧ください。むかしはほとんどの人がお見合いで結婚しておりました。私の両親もやはりお見合い結婚です。ところが，1960年代後半ぐらいを境に逆転し，いまでは，ほとんどの人が恋愛結婚しております。見合い結婚から恋愛結婚へという流れの変化です。昔は見合い結婚だったので，自分が積極的に動かなくても，周りが結婚相手といいますか，段取りを整えてくれたわけです。しかし，いまは，まず恋愛をしないと結婚できないということで，恋愛になると，今度は自由競争化です。ある意味，弱肉強食の戦いが繰り広げられるのです。まさに，恋愛をしなければ結婚できないし，恋愛がうまくいくかどうかということがそのまま結婚できるかどうかにつながっているわけです。さらに，仮に恋愛をしたとしても，それを結婚までつなげていかなければなりません。いわば，恋愛関

見合い結婚から恋愛結婚へ



結婚形態の移り変わり
(国立社会保障・人口問題研究所, 2004)

金政・相馬・谷口「図解よくわかる恋愛心理学」より引用

図3

係を維持していくための能力も必要になってきます。そういういろいろな要因があって，「恋愛はしても，結婚はできない」という人が増えているのではないかと思います。つまり，恋愛格差が広がっているということです。現在では，若者の４人に１人は結婚できないといわれていますが，こうした話は，山田昌弘・白河桃子共著『「婚活」時代』という本に詳しく書かれておりますので，ぜひ機会があったら読んでみてください。

●恋愛する人は本当に減っているのか？

未婚率が高まり，その原因が恋愛結婚の増加にあるということですが，それでは，「結婚する人が減ったから，恋愛する人が減った」というふうに考えてよいのでしょうか？ 今日の私の話は，「結婚できない理由」というよりは，「恋愛しなくなった」ということがテーマなので，そのあたりのことをもう少し突き詰めて考えていこうかなと思います。電通総研の調査データを見てください。23～49 歳の独身女性，757 名に尋ねたものですが，「彼氏がいる」という人は３割くらいです。年齢幅は広いのですが，７割は「恋人がいない」と答えています。「3 年以上いない」という人と「全く異性と交際したことがない」という人を合わせると，約半数くらいいます。

■未婚率が高まり、恋愛結婚が増えたということは、恋愛する人が減ったと考えられる？

■電通総研(2010)の調査

■23歳～49歳の独身女性757名

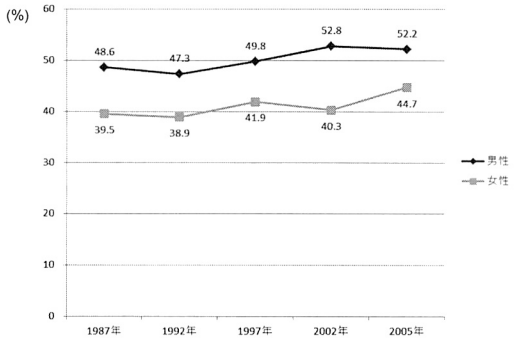
■「付き合っている彼氏がいる」30.7%
⇒7割の独身女性には恋人がいない

■「3年以上いない」と「交際経験がない」をあわせると、49.9%
⇒半数の独身女性は3年以上恋人がいない

図４は国の調査ですが，2005 年の時点で，18～34 歳の未婚者に聞いたところ，「交際している異性はいない」が男性で 52%，女性で 45%，という結果です。18～34 歳の男性というと，恋愛盛りのような気がしますが，その半数に恋人がいないというのは，ちょっとびっくりの話です。普通ですと，「もっと，みんな恋人がいるのではないか」と思い込んでしまい，それで，「自分にはいない」と悩んだりする人もいますから，５割も恋人がいないということは，かえって安心してもいいわけです。

■国立社会保障・人口問題研究所(2007)

■2005年：18～34歳未婚者6203名



「交際している異性はいない」割合

図４

次は，ニッポン放送が実施した調査ですが，20～69 歳のインターネット調査です。年齢層はあまりにも幅広いのですが，1,000 人からの回答です。やはり，「恋愛をするのが面倒である」というのが男性で 43%，女性が 47%，となっています。20 代だけで見ると数字はさらに上がりまして，女性は 50%，男性では 58%が「面倒だ」と思っています。これが，あの草食系男子といわれるゆえんだと思います。こうしたデータを見ると，確かに，恋人がいない人の割合は，調査のしかたによっても数字が変わりますが，大体 5～7 割くらいはいるのではないでしょうか。この数値が多いとはいえませんが，過去に比べて増えているというのは事実でしょう。また，先ほど示したデータのように，恋愛を「面倒だ」と思っている 20 代が半数以上いるというのも，興味深いといいますか，関心に値することかなと思います。

以上のように見てくると，やはり，若者は恋愛をしなくなったといえるかもしれません。ただ，恋人

■ニッポン放送「ニッポン人大研究」調査(2010)

■20～69歳男女1000人　インターネット調査

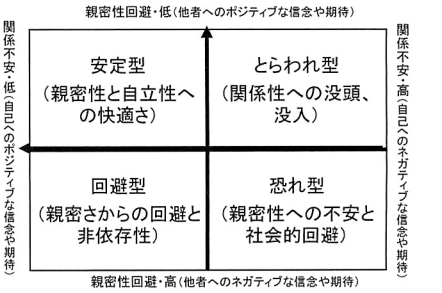
■「恋愛をするのが面倒である」
男性　43%（20代　58%）
女性　47%（20代　50%）

がいない人の割合は確かに増えてはいますが，先ほどの国立社会保障・人口問題研究所のデータをもう一度よく見てみますと，1987年はちょうどバブルの頃だと思いますが，その頃から2005年まで4%くらいしか上昇していません。この4%という数値をどうとらえるか，非常に難しい問題であります。また，恋人がいないからといって，恋をしていないわけではありません。片思いというのも，立派な恋なわけです。そう考えると，実際に若者は恋をしなくなったと明確に断定できるかどうか，怪しいのであります。さらに，恋をしなくなったということで，若者が恋愛に対して非常に消極的になっているのかというと，そうでもありません。私も授業が終わった後に学生に感想を書いてもらうことがありますが，恋愛相談みたいな質問がやたら多いのです。それで，授業の最初の何分間をその回答に使っていますが，いまも昔も変わらず，やはり若者は恋愛ですごく悩んでいるのだなと思います。それと，「恋愛が面倒である」という意見も確かに多いのですが，それは，もしかすると「面倒だ」と思っているのではなくて，過去の恋愛体験がとても辛いものであって，それで悩んだ結果の感情状態かもしれません。そうであれば，なぜ恋愛が面倒だと思うようになったのか，その点が非常に気になってきます。

実は，これまでのところは前置きでして，「若者は本当に恋をしなくなったのか？」を明らかにするのも面白いのですが，むしろ，恋をしなくなった人は恋に対して後ろ向きの態度をとっている人が多いので，そういう人は「なぜそうなったのか？」を考えたほうがはるかに研究としては面白いのではないかと思うのです。

●青年期の恋愛型：4タイプ

心理学には，従来から愛着理論というのがあります。それは，親子関係，特に母子関係を説明する理論ですが，この母子関係の様態を青年期の親密な愛着スタイルに当てはめたものが，図5です。青年期の親密な関係に対する態度，信念は四つのタイプに分けられます。まず，その前提として，2つの軸がありまして，横軸は他者との関係に対して非常に不安を持っているかどうかという軸です。縦軸は親密性回避の軸で，これは他者を避けるかどうかに関する軸であります。



青年期の愛着スタイルの4分類（Bartholomew & Horowitz, 1991）

金政（2006）「わたしから社会へ広がる心理学」より引用

図5

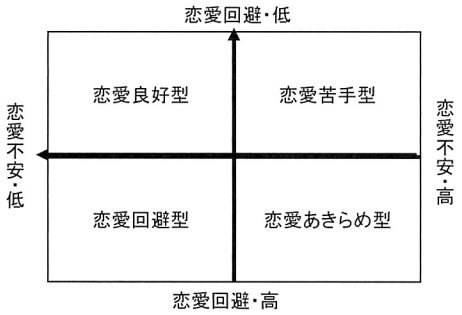
青年期の愛着スタイルの4分類
（Bartholomew & Horowitz, 1991）

愛着スタイル	主な特徴
安定型 (Secure)	親密な友人を尊重し、自分自身の自立性を失うことなしに親密な関係を維持することができる。親密な関係のことがらについての話に一貫性がある。
とらわれ型 (Preoccupied)	親密な関係に過度に関わろうとし、自分自身が幸福を感じられるかどうかは、他者から自分が受け入れてもらっているかどうかにかかっている。また、他者を理想化する傾向にある。
回避型 (Dismissing)	親密な関係の重要さを低く見積もり、感情を抑圧し、独立性や自分自身への信頼感を強調する。親密な関係についての話に信頼性がない。
恐れ型 (Fearful)	拒否に対する恐れから親密な関係を回避し、他者に不安感を持ちやすく、信頼もしていない。

金政（2006）「わたしから社会へ広がる心理学」より引用

そして，この4つの愛着スタイルの説明が次の表であります。そこで私は，この考え方に恋をしなくなった若者の話を当てはめると，うまく説明できるのではないかと考えた次第です。

図6は，青年期の恋愛態度を4タイプに分けたものです。横軸は恋愛に対して非常に不安を持っているかどうかを示しています。左にいくほど不安がなくて，恋愛はうまくいくだろうと思っているタイプです。縦軸は恋愛に対する態度で，上にいくほど恋愛を避けて通ろうとする態度が少ないタイプです。もっともよいのは恋愛良好型で，恋愛に関して何ら問題のないタイプです。非常に積極的で，興味を持ち，不安も感じていないタイプと言えます。恋愛回避型は，不安はそれほど感じていないのですが，「恋愛なんか別にどうでもいいや」と思っているタイプです。恋愛苦手型は，回避はしていなくて，「恋愛したい」という気持ちはあるのですが，不安が強くて，自信がないタイプです。恋愛あきらめ型は，不安も



青年期の恋愛態度の4タイプ

図6

高く，回避傾向も強いタイプで，そもそも「恋愛できない」とあきらめているタイプといえます。恋愛良好型を除く3つの型が「恋をしなくなった人たち」のタイプと言えましょう。

【恋愛回避型】モテないわけではないが，恋愛のイメージが悪くて，そもそも「恋なんて面倒くさい」「別に恋愛したいと思わない」と思っているタイプです。とくに問題なのは，恋愛にのめりこんでいる人に対して，それをあざわらったりすることです。また，恋愛がうまくいかなかった場合，「責任（コミットメント）を持ちたくない」と回避する傾向も見られます。

【恋愛不安型】このタイプには，次のような特徴が見られます。恋がうまくいく自信がない。恋愛はしたいが，そのやり方がわからない。出会いがない。好きな人がいるが，好きになってもらえない。コミュニケーション能力が欠如している。恋愛に対して受身。傷つきたくないという気持ちが強い。

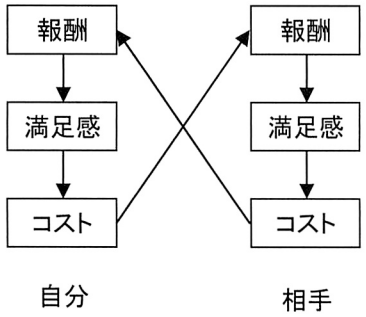
【恋愛あきらめ型】現実に，恋をすることをあきらめてしまっており，恋愛に自信がないタイプです。その背景には，「過去に恋愛がうまくいかなかった」という想いがあるのかもしれません。外見的な魅力にこだわりがあって，アイドルとかアニメとか恋愛ゲームとか，そういった二次元への傾倒が見られる場合もあります。現実には，「自分の理想を見出せるような人はいない」と思っています。

●恋愛回避型の特徴

特に問題なのは，恋愛回避型です。このタイプは「恋は面倒くさい」と思っているのですが，なぜそのように思っているのかを考えていくと，面白いことがわかります。最も大きな理由は，「コミュニケーションが面倒くさい」と思っていることです。恋愛では，出会ったり，仲良くなったりするために，自分をアピールしなければなりません。相手に自分のことを伝える必要があります。また，相手の話もよく聞かなければなりません。何かの記念日にはお祝いをしたりしないといけません。それが面倒くさいのではないでしょうか。その原因としては，恋愛関係を〈交換的な関係〉ととらえている可能性が考えられます。

「コミュニケーションが面倒くさい」ということですが，確かに，コミュニケーションは面倒なものです。そのコミュニケーションの相手がたとえ恋人であっても，非常に疲れるもので労力がいるものだ，ということを示した実験があります。たとえば，ある1枚の抽象画について恋人に何か話をしなければならなかった場合，そういうことを経験した女性は，その後すぐに学力テストみたいなものをすると，成績が悪くなったという報告があります。そもそも恋人でさえ，相手と意思疎通を図るということは，心理的に負担がかかっているということです。言い換えれば，このように考えることは，そもそもコミュニケーション自体を〈コスト〉ととらえているからではないでしょうか。しかし，恋人とのコミュニケーションは疲れるものであったとしても，普通は，それを「コストだ」とか「面倒くさい」とか「恋人としゃべって損をした」とは思わないでしょう。とくに，相手とうまくいっている場合は，そうは思いません。では，なぜ「面倒くさい」と思うのでしょうか。

心理学には，社会的交換理論というのがあります。人の社会的行動は，報酬からコストを引いた最終的な成果の大きさによって決まるという考え方です。そして，人と人との関係性は，当事者たちが具体的に報酬やコストを意識しているかどうかにはかかわらず，お互いに成果を交換しあう過程の積み重ねであると仮定しています。そうした交換関係の中で，高い満足感が得られるように行動するという前提を持つものに相互依存理論というのがあり，その中の1つに「互恵的関係がよい関係」というのがあります（図7）。つまり，「うまくいっている関係」というのは，自分が相手に何らかのコストを払うと，相手にとってはそれが報酬になるという関係です。先ほどの話でいえば，恋人とコミュニケーションで



互恵的関係のモデル図

相馬(2006)「わたしから社会へ広がる心理学」より引用

図7

何かを伝えると，それ自体は自分にとって確かに疲れることですが，恋人の方は説明してもらったおかげで何か得をしたと思うわけです。すると恋人は満足感が高くなって，今度は，自分も次にコストを払って，相手のために何かをしてあげようと思います。そうすることで，結果的に，報酬が自分に返ってくるわけです。これが延々と，ぐるぐる繰り返されることで，2人の関係が良くなってくるのです。

クラークとミルズ(Clark & Mills, 1979)は，人間関係を仮に2つに分けるとすれば，交換的関係と共同的関係に分けられるといっています。交換的関係とは非常にクールな関係で，お互いの欲求に対して責任が感じられない，つまり「相手が何をしてほしいかということに注意を払ったり，それに応えなければいけないという責任はない」という関係です。では，何によってその人間関係が成り立っているかというと，基本的にいえばお返しの関係です。「以前相手に何かしてもらったから，そのお返しとしてこうしよう」という関係です。たとえば，相手が知らない人であったり，浅い知り合いであったり，仕事上の付き合いとか，まさにギブ・アンド・テイクの関係というのが，この交換的関係です。これに対して，共同的関係とは，相手の安寧とか幸せとかに対してお互いに責任を持っている関係で，相手が何をしてほしいかを考えて，それに応えてあげたいという気持ちが根本にあります。「お返しがほしいから，相手に何かをしてあげる」のではなくて，その行為自体に意味があるわけです。相手を満足させるために，自分が何らかのコストを払って相手に報酬を与えるという関係です。たとえば，親子関係とか，恋愛関係とか，親友関係というのは，こういう共同的関係だと言えます。

それで，恋愛回避型のタイプには，こうした恋愛関係を交換的関係のように思っている面がみられます。本来は共同的関係であるべき恋愛関係を交換的関係と考えるから，コストとなるコミュニケーションが面倒くさいものとなるのです。そもそも良好な恋愛関係というものは，報酬を求めてコストを支払うのではなくて，相手の報酬のためにコストを支払う中でループができてくるわけです。何かしてほしいからするのではなくて，何かしてあげたいからしている中で，ぐるぐる回っているわけです。いわば，恋愛の発想というか，スタート地点が違うのではないかと思います。一般に，恋愛関係に入ると，その中でループがうまくぐるぐる回るのですが，第三者的に外から眺めてしまうと，報酬とかコストとかいう面が非常に顕在化して，明確になってくるわけです。つまり，恋愛をする前から，「恋愛ってこうだな，ああだな」というふうに考えてしまうと，「あー，何か報酬だとかコストだとか，面倒くさいなー」となってしまうのではないでしょうか。

また，恋愛回避型の人には，「恋愛にのめりこむ人を嘲笑する」といったこともあるのかなと思います。英語の発音が上手な人をバカにしたり，真面目に授業を受けている人をバカにしたりとか，そういうのは思春期によくあることですが，なぜ恋愛にもそれが当てはまるかというと，恋愛というのは非常に自分でコントロールできない部分が多いからです。「自分がしっかりしていればなんとかなる」というよりは，相手あっての恋愛で，非常にうまくいかない感情的な成分が多いのです。その感情的なところに一生懸命にのめり込んでいるというのは，非常に何かカッコ悪い。自分はそうなりたくないというような気持ちが，嘲笑になってくるのだと考えられます。これは“仮想的有能感”と呼ばれたりもしていますが，他人を見下すことによって，自分を持ち上げるというようなことと同じです。これと一緒で「恋愛している奴なんて，まるでバカみたいだ」と思うことで，恋愛しない自分を正当化しているわけです。ただ，そう思っていると，いつまでも恋愛できません。それで，その解決策としては，こういう人には恋愛のポジティブな側面，「恋愛にはこんないいことがあるよ」ということをまずは認識してもら

うことが大事です。とにかく，恋愛をしてみるということです。そして，その中で共同的な関係を形成してもらうことです。この恋愛のポジティブな面としては，相場(2009)が5つの側面を挙げています。①恋愛関係は，所属欲求を満たしてくれるということ。②ソーシャルサポートを受容できること。③恋愛関係が安心できる避難所とか安全基地として働くということ。これは，逃げ場所があることによって，いろいろな新しいことにもチャレンジできるという意味もあります。また，④相手を取り込むことで自己拡張できるとか，⑤理想の自分に近づくことができる，という面もあります。とにかく，恋愛をすることでプラスになることはたくさんあるのですが，恋愛回避型の人は，どうしてもネガティブな面ばかりに目が向くので，恋愛を避けてしまうのかなと思われます。

●恋愛不安型の特徴

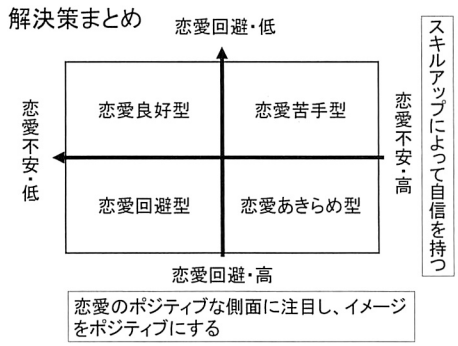
これは，「恋愛がうまくいく自信がない」「傷つきたくない」という気持ちが強いタイプです。先に紹介しました『「婚活」時代』にも書かれていましたが，結婚をしない人にも，そうした気持ちは強いそうです。その背景には，「他人の評価を避ける傾向が強い」というのがあると思います。恋愛に対して受身になってしまい，異性との接触を避けてしまうのです。「人に評価されて，自分のことがあからさまになるのは嫌だ」「人にとやかくいわれるのが嫌だ」ということで，人との接触を避けるわけです。とくに異性からの評価というのは，非常に新奇性があって，インパクトも強いので，ついついそれを避けてしまうのです。そして，そのうちに，どんどん自分に対してネガティブな評価ができあがってしまうのです。

こういう場合は，やはりコミュニケーション能力の不足が，その根底にあると考えられます。確かに，恋愛をやろうと思うと，やはりそれをうまくやるための能力が必要だと思います。といっても，それはなかなか思うように身につけられるものではありません。心理学は恋愛のマニュアルとして役立つことはありますが，そうした本を読んで，すぐにわかるというものでもありません。実際の経験を積むしかないと思います。実際に異性と接触してみることで，ポジティブおよびネガティブな評価を相手から受け取り，それに応じて自らの行動を修正することで，恋愛のスキルを磨くことです。

また，そもそも異性として良い評価をされるとはどういうことでしょうか。「外見を飾る」とか「面白い話ができる能力がある」ということでしょうか。こういうものは，コンパとか，お見合いとか，初対面の場合には役立つと思います。ただし，付き合っていくうちに，次第に「価値観が似ている」とか，「一緒にいて楽しい」とか，「優しい」「思いやりがある」とか，そうした内面的な面に目が向いていきます。ただ，こうした内面的なものは，初対面ですぐに評価されるものではありません。大切なことは，すぐに恋人関係になろうと思わないで，まずは関係を築くことです。最初は友人関係であっても，知り合いの関係でもかまいません。次第にネットワークを広げながら，だんだんと継続的な関係の中で自己を知ってもらう，というふうに考えることが大事だと思います。

●恋愛あきらめ型の特徴

このタイプは，昨今メディアでも批判的に扱われたり，面白い現象として扱われたりしていますが，「恋をあきらめて，二次元の世界へ」といわれているタイプです。一昔前と比べて，アイドルの見方は変わってきていると思います。昔はアイドルといえば，何かあこがれの対象で，自分には手が届かない存在であったのですが，最近のAKBといったアイドルたちは，ファンの目線としては対等か，下手したら見下しているようで，「共感しながら，自分で育てていく」といった感覚があるのかなと思います。そうなると，リアルとバーチャルが非常に接近してきて，リアルがバーチャルに飲み込まれてしまい，現実の恋愛など必要ないと思い込んでしまうのではないでしょうか。こうした二次元の世界は非常に心地よいと思います。そういう人に，「そんなものより，現実の恋愛のほうがいいよ」といっても，「なぜダメなの？」と反論されると，実は困ってしまうのですが，やはり二次元の世界では，結局は一方的で，自分が評価されることはないのです。自分が評価されないということは，いつまでたっても自分は成長しないし，変わることはできないので，スキルアップは望めません。すると，ますます二次元の世界へのめり込んでいってしまいます。どこかで，このループを断ち切る必要があるのかなと思います。



●まとめ

これまでの話をまとめてみますと，恋愛不安が高い人に対しては，とにかくスキルアップによって自信を持ってもらうしかないのかなと思います。恋愛に対して距離をとる回避型の人に対しては，「恋愛にはこんないいことがあるよ」と，恋愛のイメージをポジティブにしてもらうことです。そして，いずれのタイプも，実際の恋愛に入っていってもらうということが必要なのかなと思っております。

では，そういうことに対して，心理学は何ができるのか。学生の皆さんからして，心理学を勉強したら何の役に立つのか，ということが非常に気になると思います。1つは，心理学の本を恋愛マニュアルとして読むと，その中にはいろいろな研究があります。確かに，実際に役立ちそうなこともいっぱい書いてあるし，ぜひ応用してもらいたいものもありますが，ただ，多くの研究や実験は非常に限定的な状況で，限定的な人で成り立っているので，そのまま鵜呑みにしてしまうと危険です。たまにですが，「恋愛の心理学を勉強して実際に試してみたけど，うまくいかなかったので責任を取ってくれ」とかいう人がいますが，「それはちょっと待ってくれ」と思います。

もっと大事なことは，恋愛の心理学だけではなくて，心理学を勉強することで，「いろいろな恋愛のパターンがあるな」「こういうときは，こうなるのだな」と知ることによって，「恋愛は非常にプライベートなことで，自分だけにしかわからないようなことが非常に多いな」と思っていることから，「みんな，そういうふうに考えているのだ」と知ることで，自分を客観視することができるということです。「自分の悩みは自分だけのものではない」ということを理解できるようにすることです。こうした点が心理学を学んで一番いいことなのかなと思います。こうした思いは，ひいては他者理解にも非常に役立ちます。

もう1つは，これからの心理学でやっていかなければならないことですが，実際に，恋愛に後ろ向きの人たちの背中を押してあげるということです。やはり，恋愛には最低限のスキルみたいなものが必要かなと思うので，それを身につけるためのトレーニング，たとえば，大坊先生が研究されているような対人関係のトレーニングなど，そうしたものの恋愛版があってもよいのかなと思っております。

最後の方は少し駆け足になりましたが，以上で私の話題提供を終わらせていただきます。有難うございました（拍手）。

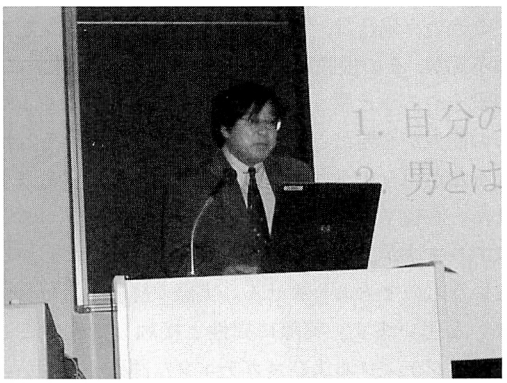
司会（大坊）：まだまだ準備した資料はあったようですが，時間もまいりましたので，次にいかせていただきます。質問もあるでしょうが，いまはとどめておいてください。お三人の報告が終わりましたら承ります。続いて，川名先生，よろしくお願いいたします。

恋愛の進展：異性のこころの理解

川名好裕
（立正大学教授）

●はじめに

立正大学の川名です。私は「恋愛の進展：異性のこころの理解」ということで，お話をしたいと思います。話題は2つありまして，1つは恋愛における魅力の問題です。もう1つは，男と女では恋愛の進展過程がどういうふうに違うのかという問題です。それらをアンケート調査や実験のデータから見ていきたいと思います。



話題提供者・川名

恋愛というのは難しいものです。男女の心の違いが１つの障壁になっております。普通，他者の心を推定するときには，一番簡単なのは，自分の心の類推から相手の心を類推することです。男の人は男心から女心を類推する。また，女の人は女心から男心を類推しますが，そこに違いがあるので，時としていろいろと問題が起きてくるのです。もう１つは，「男とは，女とは，どういうものか」に関するステレオタイプ的な理解・見方があります。これには，世の中の社会全体が提供するような大まかなもので，それも学問的でないようなものがいっぱいあります。そういうものはあまり役立ちません。やはり，心理学的な研究の知見から学んだ方がよいのではないかというのが私の考え方です。

●恋愛における魅力

まず最初に，異性の魅力ということについて考えてみたいと思います。私は，異性の友人とか恋人にはどういう魅力が重要であるかという研究をやっておりますが，友人とか恋人など，親密な関係においてさまざまな魅力項目をピックアップし，その重要性をアンケート調査で聞いてみました。初期の方法では，言葉による抽象的な質問による調査を実施しました。たとえば，恋人に対して「優しいことはどのくらい重要であるか」とか「誠実であることはどのくらい重要であるか」というように，たくさんのことについて尋ねてみました。図１が恋愛相手の魅力の重要度です。■（＝凡例「女」）が女の人から見た男の魅力の重要性です。女性が男に求めているもので一番重要なのが精神的魅力です。後述しますが，いわば対人的な魅力とか社会的な魅力ですね。そういう内面的な魅力が重要であるということです。それに対して，男性が女性に求めているのは，■（＝凡例「男」）のほうですが，圧倒的に外見的な魅力を重視していることがわかります。他の魅力についてはほとんどが低いのです。要するに，男の心は非常に単純で，外見にとらわれているということがわかります。

図２は，結婚相手に対してはどうかというと，女性が男性に期待しているのは，先ほどと同じ精神的魅力がトップですが，次に実利的魅力が急成長してきます。これは，先ほどの恋愛相手のところではまったく出てきませんでした。結婚相手になると登場してきます。実利的魅力というのは「その人と結婚するとどういう得があるのか」というものです。金持ちと結婚したほうが経済的には恵まれます。社会的な地位のある人，職業がちゃんとしている人と結婚した方が得をします。そうした，結婚して得をするような魅力を実利的魅力と言います。いわば，女性が結婚相手に求めているのは精神的な魅力が一番で，実利的な魅力が二番ということになります。では，男性のほうはどうでしょうか。外見は少し抑えられて，精神的な魅力が少し重視されるようにはなりますが，惨憺たる結果になっています。男の心がいかに簡単であるかということがわかります。

ところで，このデータでちょっと不思議に思うのは，女性は男性の外見をまったく気にしないのか，ということです。外見が重要というのは，どちらにも出てきません。アメリカの研究では昔から，異性関係では外見的な魅力が重要であるという見解がよくみられます。日本でこういう調査をすると，それが出てこないので不思議に思っていました。それで，データの集め方を変えてみました。今度は言葉

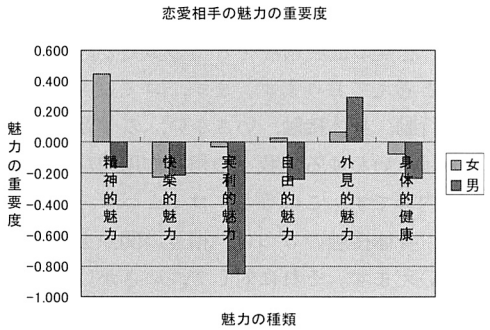


図１　恋愛相手の魅力の重要性

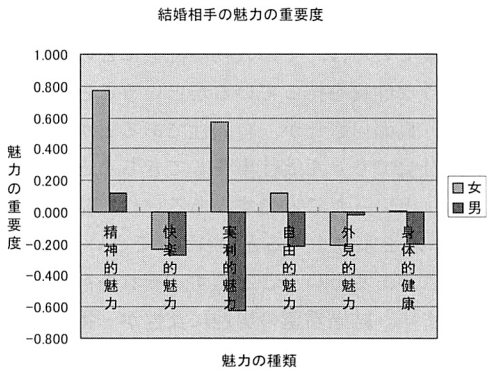


図２　結婚相手の魅力の重要性

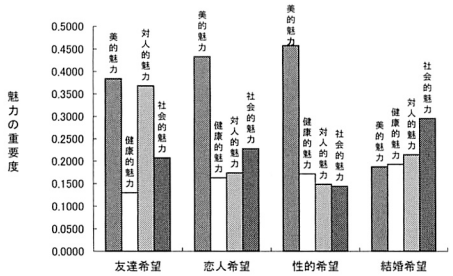


図３　女性から見た男性の魅力

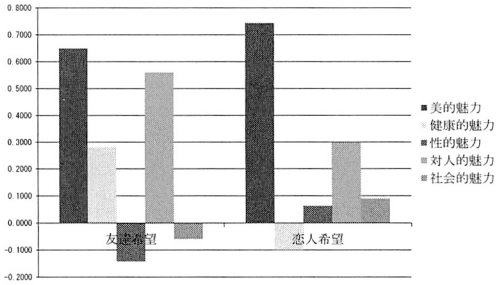


図４　男性から見た男性の魅力

で聞かないで，写真を使ってみました。40 種類くらいのさまざまな男性の写真だけを使いました。そうした写真から推定されるその人の外見的な魅力あるいは内面的な魅力など，たくさんの項目について聞きます。そして最後に，その写真の男性を友達にしたい度合い，恋愛相手にしたい度合い，結婚相手にしたい度合い，性的な相手としたい度合い，と４つの関係性について尋ねました。

重回帰分析によって，関係希望に何が重要であるかを推定したのが図３です。これは，女性から見た男性の魅力を示しております。縦軸は魅力の重要度で，数値は標準偏回帰係数の値です。友達希望で一番重視されているのが美的魅力です。対人的な魅力が２位です。恋人希望でもっとも重視されているのが圧倒的に美的魅力です。次いで社会的魅力です。性的希望でもっとも重視されているのが美的魅力で，断トツです。他のものはあまり大差ありません。ところが結婚希望になると，ここで突然様相が変わってきます。私は，これを“心理的な断層”と呼んでいますが，フォッサマグナですね。要するに，恋人のイメージと結婚相手のイメージは，このように違いがあります。結婚相手では，一番重要視されているのが社会的魅力です。この社会的魅力とは，私の定義でいえば，その人物が社会にどの程度貢献するような性質を持っているかということです。たとえば，真面目さとか，有能性であるとか，専門性とか，社会でちゃんと仕事をしてきちんと社会に貢献する，といったことです。あるいは，結婚した後で，ちゃんと家庭を守るといった，そういう誠実さ，真面目さがあるということです。それを社会的魅力といいます。結婚希望の男性に女性が一番期待しているものは，この社会的魅力なのです。一方，美的魅力の方は最下位になっています。つまり，女性にとって，結婚相手と恋人とは非常に違ったイメージで見ているということがわかります。このあたりが１つの問題ではないかと思います。要するに，恋愛と結婚は，普通結びつけて考えやすいのですが，実はこれだけ魅力構造に違いがあるということです。いわば，この違いが女性の心の中で一種の葛藤になっていると考えられます。

今度は反対に，男性から見た女性の魅力についてですが，図４は友達希望と恋人希望のデータだけですが，男性が女性の友達に期待しているものは，美的魅力が断トツです。その次が対人的魅力です。これは，明るいとか，優しいとか，思いやりがあるとか，付き合っていて面白いといったことです。ところが，恋人希望になると少し変化が現れて，美的魅力の評価がより高くなってきます。逆に対人的な魅力はそれほど重要視しなくなります。このことから，女性も同じ側面はありますが，男性がいかに外見にこだわっているかがよくわかります。縦軸の標準偏回帰係数を見ても，友達希望で男性は 0.65，女性では 0.4～0.5 近くですから，外見を重視するのは，やはり男性が圧倒的に多いということがわかります。

●恋愛の進展過程における男女の比較

まず，恋愛の進展過程を８つの重要要因から検討したいと考えております。まず，コミュニケーション，共行動，身体接触，いさかい，の４要因です。これらは，いわゆる，我々の相互作用的な「付き合い」の内容です。このうち，コミュニケーション，共行動，身体接触の３つは，相互の関係を促進する要因といえます。それに対して，いさかいは争いごとです。相手と意見が合わないとか，嫉妬するとか，浮気するとか，相互の関係を壊す方向の要因です。

さらに，内面的な心理的媒介要因として，親密性，情熱性，性欲性，コミットメントの４要因があります。親密性とは，性に関係なく，同性の友人や家族とかにおいて，親密な関係になるときの心理的，感情的なものです。それに対して情熱性とは，いわゆる異性への恋心に相当するものです。性欲性は，皆さんもすぐわかりますように，性欲に根ざしたものです。ところで，情熱性と性欲性は違うものと私は考えています。情熱性は恋心のようなもので，起源はわかりませんが，性欲とは非常に性質が異なっているということで，両者は区別しておきたいわけです。最後に，コミットメントは社会心理学で用いる概念ですが，これは，「こういう関係になると，責任を取らなくてはならない」みたいな，相手と別れられないような感情要因です。この８つの側面で男女を比較してみようと思います。

首都圏の20歳前後の男女学生にアンケート調査を実施しました。まず，本人にとって一番親しい異性を思い描いてもらいます。そして，その親しさを４段階で尋ねます。最初は，その好きな相手がまだ友達段階の場合と片思い段階の場合です。次いで恋人初期の場合です。これは，相手と性的関係のない，精神的にプラトニックな関係です。そして，恋人後期というのは，相手と性的関係がある段階です。この４つの段階で，先述の８つの変数を比較してみようというわけです。

1.　コミュニケーション

これは，対面コミュニケーションと遠隔コミュニケーションに分かれるようです。対面コミュニケーションというのは，相手と実際に会って話をする場合で，遠隔コミュニケーションは，電話とかメールなど，相手と物理的に離れているときのコミュニケーションをいいます。

まず，対面コミュニケーションの度合いを男女で比較してみると（図５），男のほうが圧倒的に片思いの段階でコミュニケーションがすごく増えています。これが，いわゆる〈男の口説き〉だと思います。女性のほうでは，友達段階ではコミュニケーションは非常に低いのですが，片思いのように相手を好きになると，圧倒的に対面コミュニケーションが増えてきております。

次に，メールとか電話のような遠隔コミュニケーションでは，恋人関係になってから増えています

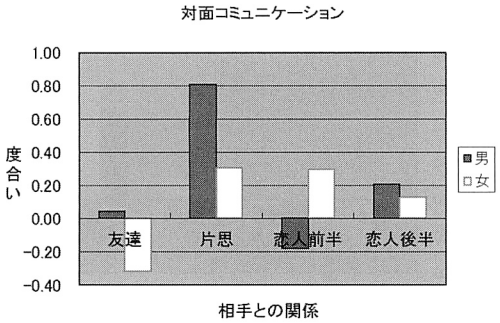


図５　対面コミュニケーションの男女差

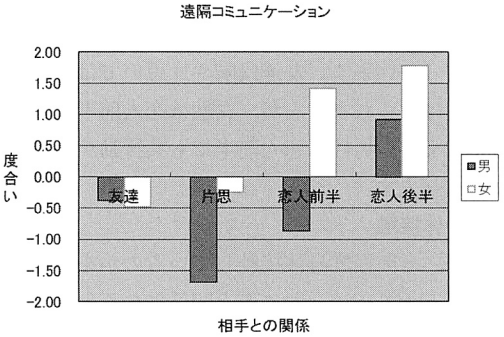


図６　遠隔コミュニケーションの男女差

が，とくに女性では，恋人前半と後半のところで急激に遠隔コミュニケーションが多くなります（図6）。要するに，恋人として相手を認めると，メールや電話が頻繁になされるということです。それに対して男性は，恋人前半のプラトニックな関係ではマイナス方向ですから，積極的ではないようです。メールを出したり，電話をしたり，返事を書いたりは「しない」ということです。このように，男女間で微妙に違いがあることがわかります。

以上のことをまとめると，次のようになります。①男性は恋愛関係の成立までは対面コミュニケーションが積極的で，女性は恋愛関係の成立から対面コミュニケーションが盛んになる。②男性より女性のほうが，遠隔コミュニケーション（メール，電話など）が盛んである。③男女とも，関係の進展に伴って，遠隔コミュニケーションが増加する。④男性は，片思いの段階では，対面コミュニケーションのほうが遠隔コミュニケーションより活発である。

2.　共行動

共行動とは，男女が一緒にする行動全般のことを指します。図７でもわかるように男女差は少ないの

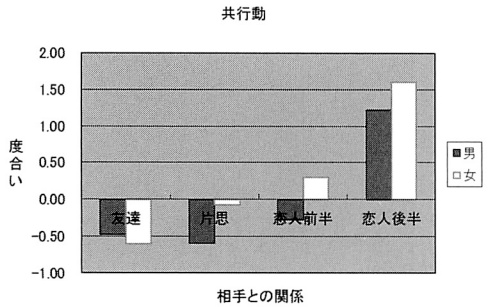


図7　男女の共行動

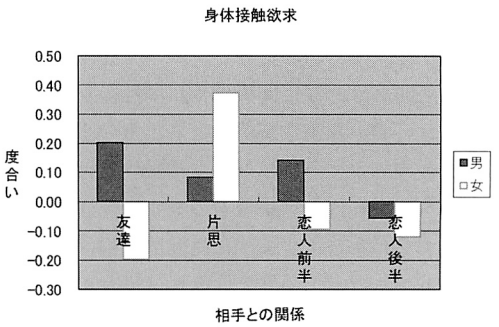


図9　身体接触欲求の比較

ですが，恋人前半から後半に変わるにつれて急激に多くなっています。友達段階や片思いではほとんど共行動はみられませんが，女性は恋人前半から増えていきます。男性は恋人前半でも共行動が少ない傾向にあります。

3.　身体接触

実際，どの程度身体接触しているのかを男女で比較すると（図8），ともに恋人関係になると急激に増えていきますが，女性のほうが積極的な傾向がみられます。男性は恋人前半でも，どういうわけか落ち込んでいますが，性的関係ができると増加します。

そこで，身体接触欲求という別の側面から検討してみた結果が，図9です。男性は，相手のことが好きだという友達段階から身体接触欲求が高いことがわかります。要するに，男性の場合は関係の初期の段階で，すでに接触欲求が強いのです。女性は片思い段階で最大ですが，これには2種類のものが考えられます。1つは親密な意味での接触欲求と，もう1つは性的な意味での接触欲求ですが，女性の片想い段階では，「相手とお近づきになりたい」「相手と親しくなりたい」といった，親密さを求める接触欲求のほうが強いと考えられます。おもしろいのは，女性は恋人関係になると，身体接触欲求が下がってくるということです。

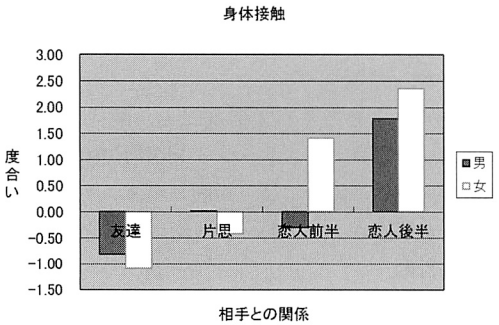


図8　身体接触の比較

4.　親密性

今度は心理的な要因です。図10で，相手との親密な関係がどの程度展開していくかを見ていきます。これも，恋人になった前半と後半のほうで男女差があります。特に，恋人前半に注目してみてください。男性は，恋人前半では親密性が非常に低い。ところが女性は，恋人になった時点から非常に高い。男性がそれに追いつくのは恋人後半で，相手と性的な関係ができてから親密性が出てくるというわけです。言い換えると，女性は愛に，男性は性に対するこだわりが強い，と言えましょう。

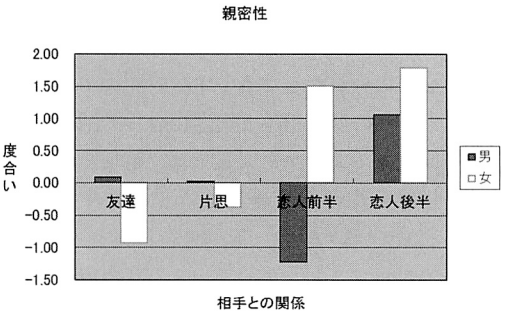


図10　親密性の比較

5.　情熱性

情熱性は，恋心の中核をなすものですが，それがどの段階で高くなるかを見てみると，女性は片思いの段階から，いわば相手を好きになったときから非常に高くなり，恋人関係全般を通してそれが続きます（図11）。男性も片思いの段階で非常に高くなる

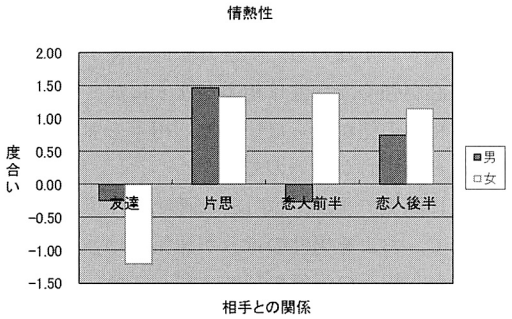


図 11　情熱性の比較

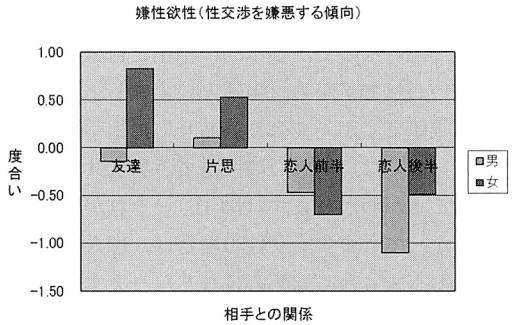


図 13　嫌性欲性の比較

のですが，恋人前半でどういうわけか落ち込み，恋人後半になってまた回復するという傾向がみられます。このパターンは先ほどの親密性にもみられたのですが，男性が相手と身体的関係のない恋人前半でなぜ低くなるのかというと，おそらく男性は性やセックスへのこだわりが強すぎるのではないかと思います。反対に女性は愛というものへのこだわりが強いので，こういう違いが出てくるのではないかと考えられます。

6.　性欲性

これについては，図 12 の通り，性的な関係ができる恋人後半で男女共に高くなります。

それともう 1 つ，私が嫌性欲性と名づけた因子があるのですが，これは性的なものを嫌う傾向です。これを男女で比較するとおもしろい結果になります。図 13 で，女性は，友達とか片思いの段階で，性的なものを非常に嫌っていることがわかります。女性は，初期の段階で，男性がたとえば性的なことを言ったり，性的なアプローチをしたりすると非常に軽蔑します。ところが恋人関係になると，男女とも性欲的なものを嫌うという傾向はなくなってきます。こういうところにも，男性のほうは性にこだわり，女性のほうは性的なものを避けて，精神的な愛の方向に関心が向いているということがわかります。

7.　コミットメント

これは，相手と別れられないという気持ちの強さです。図 14 のように，女性は，相手のことが好きになった片思いの段階から，ずっと一貫してコミットメントは高いのです。それに対して男性は，片思いの段階では高いのに，恋人前半で落ち込み，また恋人後半で回復するという，どういうわけかこの恋人前半という段階は，「親密性」「情熱性」と共通して，いつも谷になっています。おそらく，この段階が男性にとっては一番不安で，自信が持てない時期ではないでしょうか。いわば，性的な関係にまだ至っていない相手との関係について，非常に不安を感じているということでしょう。

8.　いさかい

2 人の関係を引き離すような要因をいさかいといいますが，その中で「相手と意見が合わない」といった態度不一致は，とくに女性の場合，片思いの

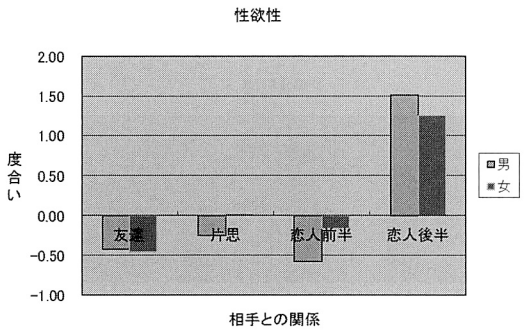


図 12　性欲性の比較

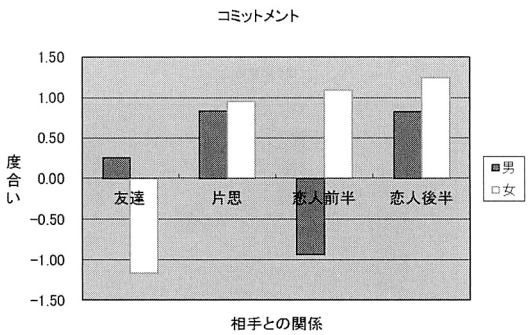


図 14　コミットメントの比較

段階できわめて高い傾向がみられます（図15）。これは，片思いなので，根本的に相手と自分の好みが合わないわけですから，当然といえましょう。

次に嫉妬ですが，やはり，お互いに相手の心が自分に向いていない片思いの段階で，男女共に嫉妬心が強いことがわかります（図16）。それが恋人になると下がってきます。女性の場合は，恋人後半になると，もうまったく嫉妬心はなくなります。

さらに，相手の嫉妬についての認知ですが，図17のように，男女間でかなりの差があり，各関係で認知が逆転しているのが興味深いところです。片思いの段階では，男性のほうが嫉妬深いと女性から認識されています。性的関係のない恋人初期関係では，女性の嫉妬心の，が男性の嫉妬心より高いと認識されています。すなわち，男性は恋人関係ができる前に嫉妬心が強く，女性は相手が恋人になった恋人初期に，相手の気が乗らないので，相手を引き留めておこうと嫉妬心が強いのです。

最後に浮気ですが，図18の通り，片思いの段階を除いて，およそ男性のほうが浮気心は強いようです。また，相手の浮気の認知に関しては，男性は恋人関係になると，相手の女性が浮気をしているのではないかと思う傾向が強くなっています（図19）。なぜかといいますと，男は自分の心で女心を推定しているからです。女性は，男性より浮気傾向が低いので，自分の相手の男性も浮気をしないと認識しがちですが，男性は自分が浮気だから相手も浮気するのではないかと考えてしまうのです。こうした傾向を私は“オセロー型浮気”“オセロー型嫉妬”と呼んでいます。シェークスピアのオセローは，奥さんが浮気もしてないのに，それを疑って相手を殺してしまうという悲劇ですが，そういうふうに，男性は女性の浮気心を勝手に推定してしまうところがある，というわけです。

以上で，私の発表を終わらせていただきます。有難うございました（拍手）。

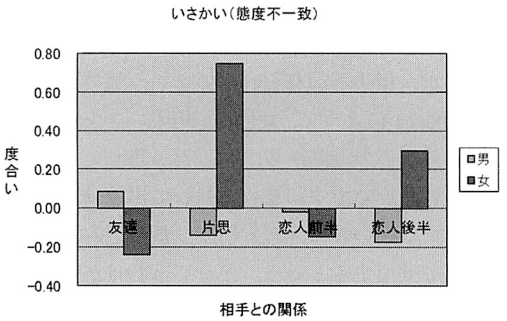


図15　いさかい（態度不一致）の比較

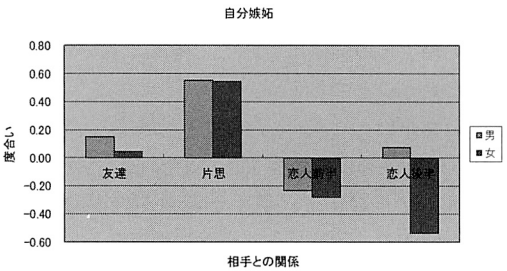


図16　自分の嫉妬の比較

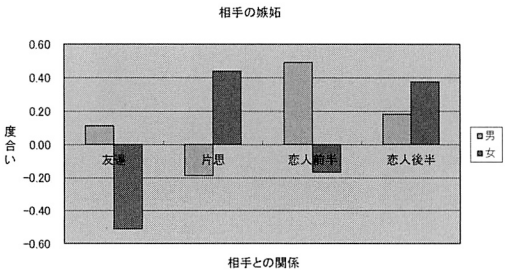


図17　相手の嫉妬の比較

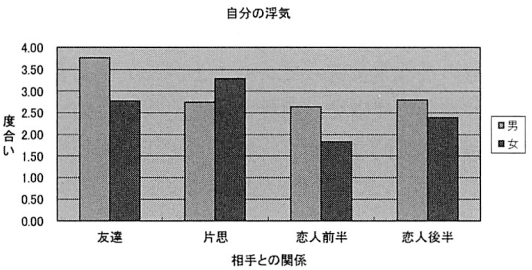


図18　自分の浮気の比較

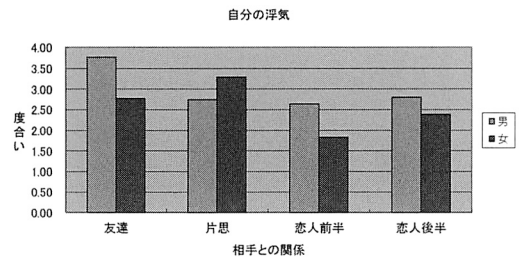


図19　相手の浮気の比較

司会（大坊）：川名先生，時間どおりに終わっていただき，有難うございました。先生ご自身の研究データを基にしたお話，非常に興味深い内容でした。皆さんからの質問はあとで承りたいと思います。それでは，次に，長谷川先生にお願いしたいと思います。

進化生物学から見たヒトの配偶者選択と恋愛

長谷川眞理子
（総合研究大学院大学教授）

●はじめに

長谷川でございます。前のお二人の先生方は，現代の日本の若者の恋愛観についての調査から，非常に面白いデータ解析をしていただきました。それで私のほうは，少し違った観点から話題提供してみたいと思います。「進化生物学から見たヒトの配偶者選択と恋愛」ということで，生物としてのヒトは，どういうふうに配偶者選択と繁殖行動を行うのか，また，それと恋愛とはどういう関係にあるのか，をお話します。

私は，ずっと長い間，いろいろな動物の配偶行動，繁殖行動の研究をしてきました。ニホンザル，チンパンジー，シカ，ヒツジ，クジャクとやってきまして，最近，この10年くらいは，また人間のことを考えることに戻りましたが，人間というのは，他の動物といろいろな点で，本当に違っております。人間は，集団を形成して社会の中で生きていますが，それは，他の動物にみられるような集団で暮らしているのとは，少し意味が違っていると思います。チンパンジーもニホンザルもシカも集団を作っていますが，彼らはみな，赤ん坊を除いて，個体が自分で食べて生きています。一緒に居て，一緒に動いて，一緒に毛繕いをする関係があり，その社会関係は大切ですが，そうであっても，その社会的な動物たちは，みんな食べるものという点では，一人で生きています。赤ん坊でない限り，全員が自分で食べています。ただ，ライオンなど，食肉目の一部には，みんなで協力して獲っているというようなことはありますが，人間は，協力して獲るだけではなくて，他のさまざまな面で，とにかく誰かのお世話にならなければ，自分一人で，単独で生きていくことはできません。その意味で，食べるという，本当に生存という原初的な点で，人間は，誰も単独で，一人で自立していけない。そういう，すごく緊密な集団を作って生きていくしかできない動物，という意味で人間は特殊だと思います。

話題提供者・長谷川

それで，食糧獲得を分業して，個体間で互いにエネルギーの流入があるような集団を形成して，いかにうまく共同作業をやるかといったことのために，この脳がものすごく大きくなり，いろいろなことを解決しているわけです。ヒトは，脳が大きくて，文化があって，いろいろなことをやっているのですが，それらが一体，根本的にどこからきているのかというと，一人では生きていけないというところ，お互いに協力し合って知恵を絞って，何とかしていかなくてはならないというところが，人間には基本にあると思います。そういう動物はほかにいないので，たとえば，生きていくこと，結婚すること，繁殖することなどに関して，単に動物の理論的な話のすべてを人間にそのままスライドして持ってきても，わからないということです。

●霊長類の中で見たヒトの繁殖の特徴―ヒトは共同繁殖―

ヒトの集団の中には必ず家族というのがあります。家族というのをどの範囲と見るかは文化によって違いますが，一般には親と子という関係です。そして，親には配偶相手という関係があって，その関係の中で子供が生まれてくる。いわば，繁殖の単位として家族はあります（ただし，その中で性関係が閉じているわけではありません…）。社会という集団があり，その中に家族があり，その中に個人があるという，重層的構造の中で初めて繁殖が可能にな

るわけです。つまり，ヒトは，個人の好みだけでは決まらない共同繁殖という繁殖形態を持っており，これはヒトの特徴です。それに，女性の繁殖可能期間は，寿命に対して非常に短いのです。このことは，私は，人間の繁殖にかかわる現象を考えるうえでのヒト固有の鍵の１つだと思っております。先ほどの川名先生のお話にもありましたが，男性はなぜあれほどに女性の外見に魅力を感じ，問題にするのでしょう？　結局は，外見の美しさは若さと結びついておりまして，なぜ若さが大事かというと，人生全体に対して女性の繁殖可能期間が非常に短いからだと思います。また，女性の性的受容は，排卵と結びついておりません。チンパンジーは，排卵期になるとお尻がぷくぷくに膨れてきて，そうなると発情全開で，性的にアクティブになり，誰とでも交尾する状態になります。チンパンジーは乱婚です。ほぼ，すべての哺乳類は性的受容期が排卵期で，排卵があると性的受容になり，交尾をしてやがて子供が生まれる，というふうに自動的になっております。ところが，人間は全くそのようにはなっておりません。自分が排卵しているかどうかさえわかりません。「性的な関係」とか「心に火がつく」とかいうことは，非常にパーソナルになっているのです。なぜ，それほどにパーソナルなことになるかというと，人間の子育ては非常に大変なことなので，女性が排卵したからといって，すぐに発情して，誰とでも配偶するなんてことは，コストが大きすぎるからです。もっと，きちんといろいろな関係を吟味してさまざまな情報が入った後で，心に火がつき，受容可能になる。しかも，そのとき，パーソナルに，そういう気持ちになるかならないかは，きわめて背景的な関係に左右されてきます。一時のことでパッといってしまって，子供をつくってはいけないのです。性的関係にはコミットメントが必要で，“排卵の隠蔽”というのは，まさにそういうことではないかと思います。

現代の人間は，高度科学技術文明の中で貨幣経済の社会にいるにで，何か一人で独立して生きていけるような気になりますが，いまの我々の社会は，人類の進化の歴史で見るとほんの最後の瞬間で起こっているようなことであります。人間は，基本的には狩猟採集民として歴史の99%を暮らしてきました。結局，貨幣経済の文明が導入された後も，基本的には，仕事をして稼ぐというのは，食べるためであって，食べるということは，みんなで一緒に社会を回していくということであります。狩猟採集社会は非常に生業形態が簡単ですから，獲ったものをみんなで分けて食べるということで成立しています。毎日の食事は，基本は女性の集めてくる植物性食物で，大人の男性は大きな獲物を，子供たちも自分で取るのが簡単な食糧を，と子供から老人までみんなかかわって生産活動をします。基本的に，これがさまざまな分業になって，専門職に分化し，その間をお金というもので取引するようになったのが現代社会です。しかし，基本的にやっていることは同じで，みんなでいろいろな分担をしながら，みんなで協力して，できたものをみんなで分配して食べていく，ということをしないと生きていけないわけです。お互いに協力しあい，社会全体，そして家族，その中での個人，というふうに重層的な構造をみんなで上手く回していかなければならない存在です。その重層的構造の中に「結婚する」とか「いい関係で暮らしていく」とか，すべてが入っているわけです。

表１のデータは，ヒト（左）とチンパンジー（右）がどのようなものを食べて暮らしているかを比較したものですが (Kaplan et al., 2000)，ヒトは，「もいでくる」とか「とってくる」とか，単純に採集すればいい食料は全体の 0.6～20%しかありません。これが現代の狩猟採集民の食事内容です。つまり，子供でも簡単にもぎ取ることのできる食料はほとんどないのです。それに対してチンパンジーは，単純採集が 91.1～99.1%ですから，離乳さえすれば，赤ん坊は十分一人立ちできます。離乳した赤ん坊はみんな，もぎ取って食べれば食べられるようなものを食べて暮らしている。しかし，人間の場合は，何らかの形で高度な抽出技術や狩猟技術を使わなければならないものが食料のほとんどを占めているので，た

表１　ヒトとチンプの食性比較

肉　29-79%	肉　0.9-2.5%
根茎　0-37	根茎　0-1.4
種子、ナッツ　0-58	種子、ナッツ　0-7
果実　0-40	果実　57.7-68.5
単純採集　0.6-20	単純採集　91.1-99.1
抽出　20.3-63.4	抽出　0-6.4
狩猟　26-78	狩猟　0.9-2.5
（カロリー）	（採食時間）
獲得困難な食物だから道具が不可欠	

だ一人でそういうことをすべてまかなって暮らすことはできません。つまり，基本的に，個人が個として生活していくことはできないのです。それで，社会の中にいろいろな制度が生まれてくるわけです。

●ヒトにおける配偶者選択

先ほどの川名先生のデータでも指摘されましたように，配偶者選択には個人の好みとか，恋愛とかもありますが，その個人は決して“個”をむき出しているわけではありません。家族とか，自分より上の世代というものが，彼らの好みと選択を反映させてきます。家族や上の世代の好みは，家の繁栄とか家の立場とか，社会的なものが入ってくるので，必ずしも個人の好みや恋愛がすぐさま配偶者選択になるわけではないのです。さらに，それら全体を取り巻く世間集団みたいなものが文化的な側面を持っており，法律，慣習，流行などがあって，そうした社会的，文化的に望ましいとされる選択も非常に大きく影響してくるのです。そこから逸脱することは，たとえ個人の好みや恋愛であっても，なかなかできないという重層構造になっています。

昔から，ヒトの配偶者選択は，伝統的に，結婚する当人同士だけが決めていたことはほとんどありません。狩猟採集民だろうが焼畑農耕民だろうが，当人同士が恋愛をして，完全に自由に結婚を決められる社会というのはなく，現代のごく一部の社会を除いて，これまでありませんでした。当人同士が結婚を決めるのではなくて，上の世代，親の世代が，その血縁集団全体として好ましいカップルをどう選択するか，ということをやってきたのです。日本では，お見合い結婚の仲人さんとか，うるさい親戚のおばさんがいて，年頃になると必ず「やいのやいの」といってきました。これは，戦前の日本だけではなく，人類の集団全体を考えても，伝統文化全部がそうだったのです。人類という集団では，男性が資源を保有している社会が非常に多いのですが，そうした社会では，結婚する場合，男性の父親または両親が女性の父親または両親に求婚をします。当人の好みなど関係なく，しばしば無視されて，家の慣習にマッチして，体裁もよく，社会的受けもよい，親同士がもっとも家の繁栄に最適だと思われる組み合わせを選んできました。もちろん，当人同士の好みと親世代の選択とはしばしば合致しないこともあったのですが，長い間，当人同士に選択肢はありませんでした。だからこそ，純粋な恋愛とか，駆け落ちとか，不倫とかが，文学や芸術の永遠のテーマになっているのです。当人同士の想いと親同士の想いが必ずしも合致しないということ，そして，当人同士の間には選択肢がなかったという点で，このズレはかなり長い間，二重構造として存在してきたのだと思います。

●一夫多妻というシステム

キプシギスというケニアの遊牧民がいますが，キプシギスの男性と女性はどのように結婚するかというと，男性には一夫多妻が認められているので，男性は土地の保有面積が多いほど妻の数を多くすることができます。この集団では，男性が牛や山羊を放牧する土地を所有しており，女性は所有していないので，女性はそういう資源を持った男性のところへ嫁にいくしかありません。それは親同士が決めますから，親としては自分の娘をたくさんの土地を保有している男のところに嫁がせたいわけです。そうすると，結果的に，土地保有面積の多い男性には嫁ぎたいと希望する女性やその親がたくさんいますから，どんどん妻を蓄積していくことができ，一夫多妻になれます (Borgerhoff Mulder, 1988)。ところがそういう男性は，どちらかというとたいていは年寄りです。つまり，若い女性が年寄りの男に集められるということが起きて，若い男性は非常に不満です。それで，戦争とか略奪が始まり，いまの法律の観点からいくと，さまざまな問題が生じてくるのです。

男性が資源を保有しており，その資源保有量に男性間で非常な格差がある社会では，娘を持つ両親から見れば，より資源保有量の多い男性を選ぼうとします。一方，男性のほうの親は，なるべく子供をたくさん産んでくれる若い処女がいいということになります。モルモンの人たちも一夫多妻の文化を持っていましたが，こういう社会でも，教団で地位が高い男性は富の保有量が多くて，妻の数も多い。一夫多妻のシステムを認めている文化は，人類史の中で非常に多いのですが，それは，男性が妻を次々と獲得することによって，子供の数を増やしていくことができるからです。女性のほうは，同時期に持つ夫の数を増やしても，別に子供の数は変わりません。直接それで家が繁栄することもありませんが，男性

は妻をどんどんためれば，子供の数を増やしていくことができます。それで，男性が多くの妻を持つには資源の確保が必要で，男性の間に資源の格差が広がれば広がるほど，一夫多妻の度合いは強くなっていきます。それは，女性にとって決して幸せなシステムではありません。男性にとっても非常に競争的で，いつひっくり返されるか，いつ殺されるかわからないような不平等社会です。男性間格差がものすごく大きい社会が一夫多妻を支える社会なのです。

では，狩猟採集民はどうなのでしょうか？ 彼らはその日暮らしで，みんなで協力して獲物を分けているので，個人の資源保有がありません。クン・サンというアフリカの人たちは，その代表的な集団ですが，では，彼らは一夫多妻にはなれないのでしょうか？ 彼らの社会では，たくさんの資源を独り占めしている男性はいないのですが，実は，男の人も女の人も複数回，結婚しております。これはどういうことかというと，クンでは資源保有がなくて，親の世代が下の世代をコントロールする度合いも弱いからです。一生に1回しか結婚しないで本当に長続きする一夫一妻は男女ともに35%ぐらいで，次いで2回くらい結婚する人が多く，3〜6回も結婚する人もいます。一夫一妻で結婚は1回だけということはあまりありません。男性の資源保有もない，男の間の格差もそれほどないクンの社会でも，一夫多妻は認められているのです。女の人で同時に夫を複数持っている人はいませんが，男の人は，一夫多妻的に振舞う人が多少いる。その中でも，30〜40代あたりに多いのです。あまり若いと，たくさんの妻を持つ力量がない。あまり年を取りすぎると，寄ってくる女が一人もいなくなる。その真ん中あたりの生産性の一番高い時期に，多少，一夫多妻の人が出てくるわけですが，そんなにたくさんいるわけではありません。多くの奥さんを持つということは，男性の資源保有量が限られているような社会では，そんなにはありえないのです。

では，現代の日本社会はどうなのでしょうか？ 一夫多妻は認められていません。一時的には，一夫一妻で振舞うしかないのです。離婚して再婚を繰り返すことは可能で，日本でも増えてきております。昔のように，資源保有が男性だけに限られていて，上の世代が下の世代の結婚を家のいろいろなことによって決めていた時代には，みんなが世話焼きで，確かに結婚する人の数は多かった。また，それ以外の選択肢がありませんでした。みんな不満があっても，それを受け入れていたし，離婚をするのは体裁がよくないとかで，我慢して結婚し続けました。それで，何とか持っていたわけですが，いまの現代社会では，西洋もわが国も，そういう重石が全部取っ払われてしまって，結婚という形態が個人の選択の問題になってきました。すると，「どういう人が本当に好ましいのか」ということが非常にパーソナルな問題になってくるわけです。しかし，現在でも，何といっても男性のほうが資源保有量は多いですから，やはり女性は結婚するにあたって，「お金を持っている男性」とか「将来，お金を持ちそうな，社会で認められるタイプの男性がいい」という好みはまだ残っています。男性のほうは「若い女性がいい」とよくいいますが，それは子供を生める期間が女性は限られているので，その間の期間を外せないというのは，生物学的には当たっていると思います。

●女性の魅力と繁殖期間の関係

デイビット・バスという人が，37か国の文化の人たちに，「結婚相手に対して，どういう特徴が大事だと考えるか」を調査したところ，ほとんどすべての国で，男性は「若い女性，綺麗な女性がよい」，女性のほうは「財力があって，年上の男性がいい」と答えた点が，男女でもっとも差が出たところでした。ところが，「結婚相手に対して一番大事なこと」という点では，それは，相手がお金持ちだとか，相手が若いとかではなく，男女共に「価値観が同じ」「ともに楽しめる」「同じような趣味があって，会話が弾む」「思いやりがある」「自分のことを大事にしてくれる」といったものが男女ともに上位にあがりました。つまり，結婚には，こうしたパーソナルな好みや価値観の一致が非常に大事なのです。ところが，そういう人を実際に見つけるのは，とても大変だと思います。自分の好みにきちんとコミットしてくれて，趣味が合うような人をどうやって見つけたらよいのか，それは本当に難しいことです。いろいろと顔の魅力を探る研究なども行われるのですが，こうしたもの1つで決められるわけはありません。先ほどの川名先生の外見的魅力というのも非常に重要な研究で，ある種の重み付けは必要でしょうが，結婚する，子供を持つということは，外見的な魅力だけで決まるこ

とではありません。重層構造の社会の中で，うまくやっていかなければ，子供はちゃんと育たないし，夫婦の関係も長く続くわけがありません。そこには考えるべき要素がものすごくたくさんあります。

たとえば，女性のウエストとヒップの比が，0.7が一番魅力的に見えるという研究があります。これは，通文化的にそう言えるのですが，では実際に，この比で女性を選ぶかというと，それは現実の話とは違います。ただ，おもしろいのは，なぜ，こういう若さの指標とか美的センスが，それほどまでに大事かということであります。それは，女性の美的魅力，性的魅力が本当に若さの指標とかなり重なっているからであります。いいかえると，人間の女性の繁殖可能期間が非常に短いからなのです。

人間の繁殖力の年齢変化を見ると，どの時代のどの民族，どの人間集団をとっても，人間は，もっとも早くて14歳くらいに産み始め，それ以前は産むことはできません。そして，どんなにがんばっても48歳くらいで産み終わり，それ以後に産み続けることはありません。これをチンパンジーと比較してみると，産み終わり年齢はほぼ同じ頃です。ただし，産み始め年齢が6〜7年違います。したがって，チンパンジーの成長と人間の成長を比較すると，人間のほうが遅く成熟して，遅く子供を産み始め，そして，同じ頃に産み終わりになります。つまり，医療が発達して，どれだけ死亡率が下がっても，あるいは栄養状態がよくなっても，女性の産み終わり年齢は決して伸びないのです。

ヒトとチンパンジーの人口ピラミッドを描いてみると，両者は非常に異なります。チンパンジーには年寄りがいません。チンパンジーは，産み終わりが死に時なのです。産めなくなったら，死んでしまいます。ところが，人間の女性は，産み終わり年齢以後も延々と生きています。どのような人口構成であろうが，社会福祉が行き届いている，いないにかかわらず，自然の状態で65歳以上は，6.5%はいます。人間は長生きなのに，繁殖可能年齢は非常に短い。したがって，どんなに頑張っても45歳くらいでおしまいになるので，その間，いろいろと仕事をしていると，生物学的にもう産めなくなってしまうのです。女性にとっては，働くことと産むことを両立させるのは，すごく大変なことなのです。一方，男性にとっては，いろいろな女性がいる中で，繁殖力があり，かつ産み終わりに近くない女性を見つけるというのは，幅の狭いところの女性を探さなければならないので，“若さ”が指標になるのはしかたがないことかもしれません。

狩猟採集民では，たくさん子供を産んでも，小さい頃によく死にますし，また，若くても死亡率は結構高いので，ピラミッド型の人口構造になります。

こうした中で，繁殖可能年齢の人たちがどうやって相手を見つけるかといいますと，さまざまな競争をしたり，親や上の世代が世話をしたりしながら，相手を見つけていきます。ところが，いまの日本は，若い人があまりいません。現代の日本は，若い頃はほとんど死なないで，ほとんど全員がかなりの年寄りまでいって，やっとばたっと死ぬ，というわけです。産み終わった年配集団はたくさんいるのですが，産める可能性がある集団が少ないのです。しかも，子供もきわめて少ない。それで，どうやって次の再生産ができるのか，大変厳しいと思います。そのうえに，上の年代が世話をしてくれない。自分で見つけろ，自己責任でやれ，となると大変です。それで，結局，そうなったときに，自分の生存と繁殖努力の分割が歪んできたと思うのです。

●一生にかける分割トレード・オフが始まっている

図1にあるSomaticというのは，“自分の生存とか自己に対して投資する”ということです。「自分をもっとよくする」「もっと教育を受けることで技術を身につける」「自分のものを増やす」「自分の財産をつくる」ということ，つまり「自分の体への投資」です。Mating effortとは，“誰がいいかなと，将来の配偶相手を見つける”ということです。Parentingは，“子供を産んで，育てる”ことです。

昔は，特に女性にとって，自分自身に対して自己投資する可能性は，ほとんどありませんでした。成人した女性は，とにかく結婚相手を見つけて，子供

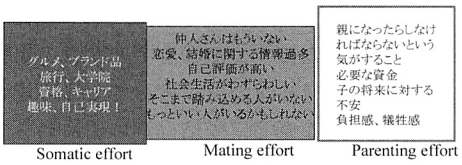


図1　分割のtrade-off
自己の生存と維持に向ける可能性（選択肢）が多い場合

をつくるしか人生の選択肢がなかったのです。配偶努力と子育て努力だけが大きくて，自己投資（自己の生存と維持に向ける可能性・選択肢）は非常に少なかったので，何とか結婚して子供を産まなくてはならない方向に社会全体が動いていました。だから，子供がたくさん産まれて，昔は人口構造がピラミッド型になったわけです。それが，いまでは，自己の生存や維持に向ける可能性・選択肢が非常に大きくなって，グルメ，ブランド品，旅行，資格やキャリア，趣味など，自己実現にかけることのできる魅力的なものがたくさんあります。一方，配偶者選択の努力は，「仲人さんはいないけど，恋愛や結婚に関する情報はいっぱいある」「自己評価が高いから，自分を安売りしたくない」「もっといい人がいるに違いないと迷う」「結婚生活はわずらわしい」「結婚まで踏み込める人はいない」「いまよりいいチャンスがあるかもしれない」と，延々とその努力はするものの，決断できない。さらに，「親になれば苦労が山とあって，お金も必要になるし，子供の将来に対する不安もあり，負担感や犠牲感も増えてくる」ということで，子育て努力になると，もう嫌だという感じになってしまいます。いまは，この自己投資と配偶者選択努力に対するところが肥大化して，子育て努力が少なくなっているのだと思います。進化生物学的に見て，この分割トレード・オフが起こると，必ず認知的にも欲望の上でも，あるものが大きくなればなるほど，他のものは少なくなります。そこのところを変えない限り，どうにもならないのではないかと思います。

●おわりに

先ほど川名先生から嫉妬の話が出ましたが，私たちの研究で，次のような調査をしたことがあります。自分のパートナーが，別の人に対して，愛情はないけど，肉体的な関係を持ってしまった場合と，愛情は移ってしまったけど，まだその人と肉体関係は持っていないという場合では，どちらに嫉妬を感じるかという調査です（表2）。アメリカの男性では，女性が肉体的に他の男に移ってしまう場合，76%が強い嫉妬を感じ，愛情は別の男にいってしまったがまだ肉体関係を持っていないときは，24%しか嫉妬しない，という結果が得られました。ところが，アメリカの女性は逆で，男性が他の女性と肉体関係を持っても，32%しか嫉妬しません。しかし，肉体関係を持ってはいないが，愛情が移ってしまった場合は，68%が嫉妬を感じています。一方，日本では，愛情が移ったことに対する嫉妬は男性よりも女性が高く，肉体関係があることに対する嫉妬では男性のほうが女性より高い，というのはアメリカと同じだったのですが，日本の男性は肉体的なことに嫉妬を感じる割合が非常に低く，アメリカの76%に対して日本はたった38%でした。逆に愛情のほうでは，24%に対して62%と，ものすごい違いがあります(Buss et al., 1999)。

表2　嫉妬という感情

	肉体 男性	女性	愛情 男性	女性
アメリカ	76%	32%	24%	68%
韓国	59	19	41	81
日本	38	13	62	87

この理由をいろいろと考察しましたところ，1つわかりました。日本の被調査者に問題があったわけです。この調査の対象者は東大の駒場の1年生です。彼らのほとんどは肉体関係を持ったことがないのです（笑い）。それに対して，アメリカの学生は18歳ですが，ほとんどみんなが高校のときからたくさんの経験があります。東大の1年生は，性的な関係を持ったとき，どういう気持ちがするのか，があまりわかっていない。そういう人たちは愛情に重きを置いて，肉体関係への嫉妬はあまりわからない。一方，性的経験のある男性は，肉体的な関係に対する嫉妬心が非常に強いということで，この差は説明できるのではないかと思います。はからずも，大学1年生の性的体験のあり方を暴露したことになりました。

このあたりで終わりとさせていただきます（拍手）。

司会（大坊）：どうも有難うございました。とても興味深い内容でした。最後のお話は心理学を専攻している学生さんにとっては一つの教訓になりますね。つまり，「調査はどこでやってもよいわけではない」ということです。

■質疑応答

司会（大坊）：さて，3人の先生方からのお話を受けて，まず，ご質問あるいはコメントをいただきます。その後に，各先生からお答えしていただきます。どうぞ，ご遠慮なくご発言ください。

●会場からの質問

Q1：谷口先生にお尋ねします。

昔と比べて，いまは恋人がいない人の割合が本当に増えているのか，疑問に思っています。それは，結婚する人が少なくなっているということから類推されているのではないでしょうか。昔でも，恋人がいる人は，そんなに多くはなかったと思います。知り合う機会という点で，昔は仲人さんとか世話焼きのおばさんがいましたが，一方で職場結婚も結構多かったように思います。しかし，いまは職場結婚はご法度というか，チャンスが少なくなり，しかも，職場での恋愛がうまくいかないと，すごく居づらくなるような雰囲気も強いようです。さらには，忙しくて恋愛をする時間的なゆとりもない。そうした，本人の恋愛欲求の問題と環境の問題が複雑に絡んでいるのではないかと思っています。たとえば，長野県の少子化対策県民会議では，商工会議所が中心になって，県をあげてお見合いのチャンスを作ろうという活動が展開されています。しかし，組織を作ってもなかなか人が集まりません。やはり，本人自身の恋愛欲求と出会いの機会という2つの方向からやっていかないと，どうも解決しない問題ではないのかなと思っております。

Q2：長谷川先生にお聞きします。

男性のほうが浮気心が強く，しかも性的関係を望むような浮気が多いということでしたが，人間は理性があるのに，それを押さえきれず，なぜ浮気をしてしまうのか，そのあたりのことを心理学的な観点から教えていただけませんか。

Q3：谷口先生に質問です。

恋愛不安型の処方箋として「経験を積む」「社会的スキルを磨く」といったことを挙げられましたが，スキル不足のままダメな恋愛経験をいっぱい積んでしまって，いわば学習性無力感に陥り，その結果，恋愛あきらめ型に移行してしまうということはないのでしょうか。

Q4：川名先生への質問です。

フロアからの質問

男性と女性の魅力でいくつかの側面を評定されていましたが，男性は概して女性にあまりいろいろな魅力を感じていないような気がしました。評定値がどれもほぼ一律のような感じがしました。一方，女性はわりと強弱があったような気がします。いわば，男性は女性に対してあまり魅力そのものを求めていないのかなと思いました。その点を解説していただきたいのですが。また，対面コミュニケーションで，男性の場合は片思いの段階で非常に数値が高く，女性の場合は恋人前半で数値が高くなっていたようで，共行動の場面では，男女共に片思い段階ではマイナス方向だったのが，女性は恋人前半になるとプラスに転じるといったねじれ現象が起きていますが，それは，男女で実際の行動の認知のとらえ方が違うことから生じているのか，あるいは，友人段階，片思い段階というように，相対的に比較するから，そうしたズレが起きているのか，教えていただきたいと思います。

また，長谷川先生に質問です。

モルモン教徒のような一夫多妻の関係は，谷口先生がお話されたコストと報酬の関係が逆転しているような状況とも言えると思います。いわば，相手の報酬を考えてコストを払うのではなくて，自分の報酬を考えてコストを払う，というような関係性が成り立っているのではないでしょうか。たとえば，土地の保有面積や資産が多い男性ほど多くの女性を持てますが，反対に，その時の男性の精神的な満足度は低いのではないかと思うのですが，なぜ夫婦関係は崩壊しないのでしょうか。それがすごく疑問に思えます。

Q5：谷口先生に質問です。

愛着スタイルから恋愛を四つのタイプに分けておられますが，各タイプはそれぞれ何パーセントくらいいるのでしょうか。また，若者は恋をしなくなったということですが，先ほどの質問者と同じで，晩婚化現象が進んでいるということは，結婚するまでの時間が非常に長くなってきているということですから，実は，昔よりいまの若者のほうが恋愛をずっとしているのではないかと思っています。私のゼミは恋愛ゼミといわれていまして，ほとんどの卒論が恋愛心理学なのですが，授業中でもコンパのときでも恋愛話で，女子学生のほとんどには彼氏がいるという状態です。そして，1カ月も彼氏や彼女がいないと寂しいみたいな学生がたくさん私のところには来ております。彼らは何回も恋愛をしているようです。ですから，先生のお話にありましたように，恋愛自体を「面倒くさい」と思っていたり，「恋愛は，いくらやっても2回で，それで結婚だ」といったような状況とはかなり違っているような感じがしております。むしろ恋愛をたくさんしており，その恋愛があまりにも長いので，「ちょっと面倒くさいな」とか，「飽きてきたな」とか，「でも，うまくいかないな」とか思っているだけで，トータルの母数に対する恋愛の頻度というのは，やはりそれほど低くはないのではないかなと感じています。それともう1つ，恋愛というのはパラドックスで，恋愛のスキルをあげることが本当によいことなのでしょうか。普通は，英語のスキルをあげるとか，対人スキルをあげるのは，いいことだと思いますが，恋愛を何回も経験してスキルをあげたらどうなるのでしょうか。むしろ，スキルのない人のほうが好まれたりしませんか？　恋愛のスキルをあげていくと，結婚に結びつくのでしょうか。多くの若者が恋愛のスキルだけ上手になって，たくさんの恋愛をするようになると，これは，乱婚とまではいいませんが，どのような社会になるのでしょうか。恋愛に限っていえば，「スキル向上のために，もっと恋愛を経験しろ」というのはどうか，という気がしております。

次に，川名先生にお尋ねします。

先ほど質問者も言っておりましたが，対面コミュニケーションや共行動で，男性の恋人前半と女性の恋人前半で非常に大きく数字が変わっていますが，これは，恋人前半という段階の決め方に，男女間で認知の違いがあるのが原因ではないかと思います。女性はセックスしなくても「これで恋人だ」と決めたらそこから恋人でしょうが，男性の場合の恋人前半というのは非常に微妙な関係で，本人が「本当に恋人だ」と思っているのかどうか，そのあたりの違いが結果のズレに影響してきているのではないでしょうか。

進化心理学には興味があります。いつも思うのですが，進化心理学では，繁殖的に見て，男性は若い女性が好きで，人類はそうやって繁栄してきたのだということですが，若さだけではなくて，なぜ美しい女性を求めるのでしょうか。川名先生のお話にもありましたが，確かに，対人魅力のかなりの部分は若さだと思いますが，それに加えて，男性は美しい人も求めています。なぜ美しい人を求めるかというと，「バランスのよい人がいい」とか，いろいろな説明がされています。私もきれいな女性が好きですが（笑い），女性のほうでも最近はイケメンブームで，美しい男性が好きなようです。この“美しさ”というのは，進化論的にどういうところで，その根拠があるのか，長谷川先生にお聞きしたいと思います。

Q6：谷口先生は，非婚率が上昇しているとか，初産の年齢が遅くなっているといったお話をされましたが，その原因の主なものは，社会的・経済的な要因が強いのではないかと思っております。いま，日本全体は不況で，経済情勢の悪化がすごく深刻になってきております。それに伴って，年収が減少したり，派遣社員のため結婚できなかったり，親が許さなかったりとか，いろいろな原因で初婚率が下がっています。やはり，経済的に安定しないと子供はつくれないとかで，結婚が遅くなっているのではないでしょうか。『「婚活」時代』という本でも，経済的・社会的な要因が大きな原因であると書かれております。

それと，長谷川先生が最後におっしゃった嫉妬心のことですが，日本では小説などで「寝取られた」という言葉がよく使われますが，そういう心理が背景にあって，日本の男性では肉体的な関係に対する嫉妬心のパーセントがアメリカと比べて低かったのではないでしょうか。

谷口：「恋人がいない人の割合が増えたというが，本当にそうなのか」という質問ですが，私も増えて

いるとは思っておりません。「増えている」といったのは，先ほど提示しました国立社会保障・人口問題研究所の調査で，1987年当時では男性の48.6%に恋人がいなかったのが，2005年では52%に増えてきているということで，決してこの数字が大きいという意味ではありません。では，実際はどうなのかといいますと，よくわからないというのが正直な感想です。性経験の率は上がっているというデータもありますから，もしかすると二極化しているのではないかとも考えられます。恋愛をすごくしている人と恋愛から距離をとる人，前向きな人と後ろ向きの人との差がすごく激しくなってきているのかもしれません。いずれにしても，今日の話の中心は，恋愛をたくさんしている人のことではなく，恋愛から遠ざかって後ろ向きの人もいるので，その原因を探ってみようというのがテーマであります。

また，恋愛や結婚に至るには状況や環境の要因，機会の問題も大きいのではないかというご意見ですが，確かに『「婚活」時代』の本ではそうした要因についてかなりの紙幅をとっています。ただ，著者は社会学者ですから，そういう切り口をしているのだと思います。私も社会的・経済的環境の要因は大きいと思いますが，今日の話はあくまでも心理学の専門家が心理学的な立場から見た恋愛・結婚観である，ということでお許し願います。

また，「スキル不足のまま恋愛経験を積み重ねていくと，ネガティブな経験ばかりして，ますます恋愛に対してネガティブなイメージを持つようになるのではないか」という質問ですが，私も確かにそのとおりだと思います。単に「経験しなさい」と後押しするだけでは，いかにも無責任でしょう。また，恋愛に対してそれぞれ個人が持つイメージがあるので，それを無視して「タイミングはどうこう」とおせっかい焼きするのも困るでしょう。ただ私は，周りのサポートがすごく大事だと思います。たとえば，失恋したとき，いかに立ち直るか，自尊心をいかに回復するか，なくした自信をいかに取り戻すか，ということでは，周りのサポートが大いに役立ちます。友達が「いやー，そんな失恋したけど，あなたはとても素晴らしい人だよ」と言ってくれると，落ち込みの大部分が解消されるのではないでしょうか。いろいろなネットワークを持ちながら，その中で恋愛を経験していく。さらに，それをサポートするようなものがプライベートにもパブリックにもある，というのが大事かなと思っております。

あと，「恋愛スキルを上げることが，いいことなのか」という質問ですが，ここでいうスキルとは，「うまく喋れる」とか「おしゃれだ」とか，うまく相手に見せることができるスキルではなくて，もう少し内面的な，「思いやりがある」とか「相手の欲求にすぐ気づく」とか，そうした心遣いを指しています。ただ，それをスキルと呼べるかどうか，また，そうした心遣いを実際に身につけるにはどうすればよいか，というと難しい話になってくると思います（付記：司会者から「それは，恋愛のテクニックの問題とスキルとを分けて考えたらどうですか？」という発言がありました）。

川名：確かに，女性から見た男性の魅力，とくに結婚相手のときは，非常にバランスよく評価しています。美的魅力だけではなく，社会的魅力や対人的魅力といった内面性もちゃんと重視して，それに健康的な魅力も考慮しています。一方，男性については，結婚相手としてのデータは十分集まっていないので，何ともいえませんが，友達希望とか恋愛希望では，きわめて単純構造で，美的魅力や性的魅力が圧倒的に突き出ています。内面的なものについては，対人的魅力は付き合ってくうちに重要性が次第にわかってくるのでしょうが，社会的魅力はほとんど考慮されていません。どうしてこういう構造になるのかというと，あとで長谷川先生からも説明があると思いますが，進化心理学的な解釈をすると，人間も含めた哺乳類のオスの大部分は，交尾という生殖行動の役割を終えると，どこかへ行ってしまいます。あとは，メスが母子家庭でもって育てていくというのが多いのです。唯一，タヌキくらいでしょうか，家庭を持って，お父さんとお母さん両方で育てていくというのは。両親で子供を育てていく哺乳類は，5%くらいしかいないと聞いております。ところが，人間は例外であるタヌキと同じで，お父さんとお母さんが家庭を持って子供を育てていきます。それが果たして遺伝的なものなのかといいますと，むしろ社会的な要請が大きいのではないかと思います。要するに，男性は資源を持っています。稼いで財力があるわけです。そういう財力のある人が助けてあげないと，無事に子孫が育ちません。人間の場合，20年近くも子育てをします。時間がかかるわけ

ですから，男性も子育てを手伝わなくてはなりません。その意味では，遺伝に組み込まれているともいえますが，むしろ，社会的な規範の中で“結婚制度”みたいなものが作られてきたのではないか，と個人的には思っています。もちろん，遺伝子という観点からは，そんなことにはお構いなしに，男性は性に非常に関心が強く，交尾することが重要なわけですから，それに関連した性的魅力とか美的魅力に支配され，反応せざるをえない構造を持っているのではないかと思います。それに対して内面的な魅力は，恋愛でも結婚でも，長期的な付き合いの関係の中で考慮され，重要視されていくものではないかと考えております。

それから，恋人前半・後半といった名づけ方の問題ですが，これは，「性的な関係があるか・ないか」ということで分けました。時間の問題もあまり関係ありません。男性の場合は「性的な関係がないと，恋人として見ないのではないか」という質問がありましたが，そうかもしれません。女性が重視する性的なものは繁殖行動としての交尾だけであって，あとの養育のことや，最終的には自分の老後の問題など，女性は非常に総合的にものを見ていると思います。男女の関係を考える場合，私は快楽原理と生存原理という言葉を使って説明しているのですが，快楽原理は純粋に快楽だけに支配されるものです。たとえば，友達や恋人の段階で，相手を性的に見て美的魅力を圧倒的に重視するということは，それは快楽原理が支配しているのだと思います。それに対して，結婚相手をバランスよく見るということは，「生活がかかっている」とか「自分の一生がかかっている」とかいうふうに，そこには生存原理が働いているのではないかと考えられます。

質問に答える話題提供者

長谷川：「男性には，なぜ浮気をする人が多いのか」という質問ですが，本質的には，哺乳類のオスはメスを次々と配偶していくことによって繁殖成功が上がりますから，そういう性質は進化していきます。ところが，メスは次々にオスを取り替えても自分の繁殖成功は上がりません。自分の繁殖スケジュールに従ってしか上がらないのです。ですからメスでは，次々にオスを取り替えていくという要素はあまり進化しにくいのです。哺乳類のオスは自分でミルクを出さないし，交尾したあとの子育ては全部メスがします。それで，相手を次々に取り替えていけば子供の数は必ず増えてきますから，そういう性質は次の世代に広がりやすいのです。哺乳類のオスがどんどんメスを取り替える傾向は，ある意味，一夫多妻傾向でして，積極的に不利になるときだけ，そういう性質が抑えられるようになっています。一夫多妻とか乱婚ではなくて，一生一夫一妻というのは，哺乳類4,500種の中のわずか5%しかいません。おそらく，人間はその中に入いっているのでしょう。哺乳類全体の傾向として，男性が自分で子供を積極的に育てなくても，女性のほうが何とか育ててくれるだろう，何とかしてくれるだろう，と考えているわけです。そういう要素は，女性側には全く見られません。「男性が育ててくれるだろう」と考えることはほとんどありません。この男女の考え方のギャップが大きいのです。したがって，次から次へと相手を取り替える傾向は，一般的に男性のほうに高くなるというのは，こうした要素の違いからきているのではないでしょうか。ただ，人間の男性が全員そうした傾向があるかというと，そうでもありません。かなり二極化しているようです。誠実に相手とコミットメントする男性と，次から次に相手を取り替える傾向のある男性の両タイプがいますが，バランスからいうと，誠実型のほうが多いです。浮気性の男性は頻度依存型で，そういうタイプの人は必ずいますが，主流になることはないようです。

次に，一夫多妻社会でのコストと報酬との関係で，男性の土地の保有面積や資産が多いほど多くの女性を持つことができますが，そのとき，「男性の精神的な満足度は低いと思うが，なぜ夫婦の関係は崩壊しないのか」という質問ですが，スライドでお見

せしたキプシギスの人々は，子供の死亡率などすべてを含めて，生きていく材料として，土地保有の多い男性ほど，女性をたくさん持てるわけです。男性側には山羊と牛と土地の保有率に関してのすごい競争があるのですが，女性側はそれらでトップの男性を狙っているわけです。たとえば，好きな男性がいるが，山羊も土地も持っていない。しかし，一夫一妻的に自分だけを想ってくれる人と結婚する場合，子供がどれだけ産まれてどれくらいの生存率があるか，反対に，たくさんの山羊と土地を持っているが，二番手，三番手の奥さんとして結婚する場合，どれだけの子供が残るか，この２つのケースを考えると，後者のほうが有利なので，みんなそっちのほうへ行きます。したがって，それはそれで，両方にとって均衡点になっているわけです。もちろん，それで本当に心が幸せかどうかは，いろいろと葛藤はありますが。

それから，若さと美しさの関係ですが，もちろん，若いということは，「肌にツヤがある」とか「シワがない」などの美しさでもありますから，両方は非常に密接に結びついていると思います。それと，先ほど言いましたが，人間の社会は重層的になっており，カップルであるということは，お互いの満足のためだけではなくて，「自分たちは他者からどのように見られているのか」「社会の中で自分たちはどのように評価されているのか」という点で，それを満たすという意味あいもあります。たとえば，美の概念は共有されているので，平均化してマスキリナイズしたり，フェミナイズしたりした顔というのは，「きれいだ」と思うのが人類共通の想いなのです。こうした共有された美の概念と，一方では，時代によって変わる概念がありますが，そうした共有されている好みに対して，自分の恋人はいかに水準が高い相手であるか，そしていかにカッコいいか，を自分自身や，他者や社会に向けてアピールしたいわけです。個人の好みだけではなくて，社会の中で自分たちがどのように見られているか，ということの２つの組み合わせでカップリングが行われていると思います。

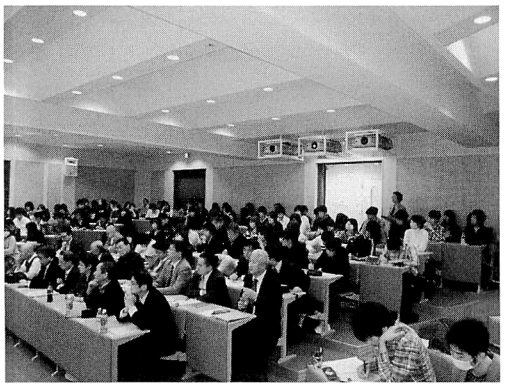
それと，「アメリカ男性と比べて，日本の男性が肉体的な関係に対する嫉妬心の割合が低いのは，“寝取られた”という言葉があるように，日本の習俗みたいなものが背景にあるからではないのか」という質問ですが，自分の女を他の男に寝取られてしまった男のことを“カコルド(cuckold)”といいますが，日本だけではなく，こういう話は全世界どこにでもあります。いわば，全世界の男性にとって，それは非常に脅威です。「自分の女だと思っていたのに，実は他の男の人とセックスをしているのではないか」と思うのは，とても強い妄執です。仮に，実際に浮気した場合，どの程度罰則を厳しくするかは，文化によって違いがあります。ユダヤキリスト教系では，他の男と一緒になった女は，夫が殺してもかまわない。とにかく，「自分の女だと思っていた女が，実は他の男に寝取られているのではないか」という想いは，全人類の男性に共通した強い妄執のようですね。

■まとめと閉会宣言

司会(大坊)：どうも有難うございました。まだ，ご質問もあろうかと思いますが，大分予定の時間を過ぎてしまいました。私も，３人の先生方に質問とコメントがあったのですが，すべて省略させていただきます。本日のシンポジウムの内容は，来秋頃発行予定の「応用心理学研究」に掲載されますので，そのときに改めて私のコメントは付け加えさせていただきます。

さて，先生方のお話を聞きまして，「本当に男って，どうしようもないのかな？」と思わざるをえませんでした。長谷川先生からいただいたお話からは，人間以外の動物の行動との比較で，人間の独自の特徴について多くのお話をいただきました。動物の行動に人間のさまざまな工夫のモデルを求めよう，ということがよくわかりました。

最後に，まとめ的なものになりますが，第１には，親密な関係というのは，当然，濃密な自他の照合として，自分とはどのようなものなのかという検証，それから，その社会の関係の単位としての「まとまり」というのがもっとも親密な関係にあるわけです。次に２番目としては，性をつなぐ関係として考えますと―もうこれ以上の濃密なコミュニケーションはありませんが―，そこにさまざまなコミュニケーションスキルが働くことになるわけです。そして，男性，女性というのは，先ほどの川名先生の話にありましたように，それぞれ独自の文化なのです。男女が恋愛を通じて融合することは，男女の関



満員の会場

係だけにとどまらない広がりをもたらすものです。個人や特定の地域，世代などのさまざまな単位を超えた意味でのことも含めた異文化の融合であり，基盤となる社会のモデルになっているわけです。それから3番目には，文化的な進化です。生物学的な進化を考えていくと，まさしく「命をつなぐ，文化を紡ぐ」ことに結びつくわけです。人類の歴史，生物の歴史を考える意味でも，非常に重要なテーマであります。もちろん，われわれは日々の生活で，このようなことを頻繁には考えもしないで，誰かを好きになったり，嫌いになったりしているわけですが，これはなぜなのでしょうか。人類一般に共通する，持続的な共生の基本形だと考えております。これをきっかけに，さらにいろいろな角度から恋愛の広がりについて考えていくべき重要なテーマだと思っております。

本日，会場にお集まりくださった方々のご協力に感謝いたします。そして，お三人の先生方のお話に改めてお礼を申し上げたいと思います。どうも有難うございました（拍手）。

●司会者からシンポジストへのコメント

以下に，紙上討論とはいきませんが，当日会場で共有できませんでした，シンポジストへのコメントを挙げさせていただきます。

〈谷口淳一先生へ〉

これまでの社会心理学を中心とする研究成果を踏まえるならば，「うまく恋愛できない人に対してアドバイスできることが少なくない」とのお話しがありました。『史上最強図解　よくわかる恋愛心理学』の続編，実践編としての“マニュアル”を大いに期待したいところですが，いざとなると，なかなか容易ではないのではと思います。つまり，研究成果から多くのルールは明らかになってきていると思いますが，マニュアルとなると，個人に合わせた指南が期待されます。青年をいくつかのタイプに分けてお話しいただきました。その特徴もある程度理解できます。ただ，多くの場合，特定の場面での効果的な行動方法の典型例を挙げることはできるでしょうが，多くの読み手は，どうしても具体的な手順を知りたがるものだと思います。ですので，個々人の特徴，状況の原理を盛り込み，一般性の高い，柔軟に適用可能なマニュアルをどう構成するのかは，おそらく，数十の学術論文よりも難しいのではないかと思わざるをえません。また，恋愛行動については，経験を積むことが何を意味するのか，つまり，多くのパートナーとの関係によるものなのか，長い恋愛期間によるものが重要なのかということは，判断しがたいことのように思います。むしろ，恋愛が個人や関係，さらに集団や社会にどのような波及的な効果をもたらすのかについて研究が進むならば，多くの悩める者にとって示唆するところが多くなるのではないかと思います。つまり，反語的な意味を込めてですが，「恋愛は必要か？」，さらに「結婚は，子どもは必要なのか？」との問いを改めて考えてみることこそが，われわれにとって重要なことではないかと思います。つまり，恋愛できない，結婚しない人々が増えている背景には，人間観，社会観を透かしてみる必要があるように思っています。〈後ろ向きに見えること〉には，相応の理由があるのではないのか―社会的なレベルでいうならば，単に生活スタイルの多様性というだけではなく，地球上の生物としての多様性のバランス，人類の歴史の今後などを含めて考えてみる必要があるのではないでしょうか。

〈川名好裕先生へ〉

クリアな論調で，男女の恋愛行動，意識の特徴を詳述していただきました。特に，親密な関係の段階（タイプ）との関連で，恋愛行動の特徴，コミュニケーション，欲求などについて興味深いデータを示していただきました。そこで浮かび上がってきたこととしては，さまざまな点についての男女の違いです。明らかに男女の異文化を感じます。そうならば，

お互いを理解することはできるのでしょうか？　お互いを理解するには，何らかの共通するものがないと，そうならないのではないかと思います。男性は，女性の身体的魅力に注目し，容易に「結婚相手として」といったとらえ方をする，生活に通じる実利的魅力を重視する，一方，女性は男性の精神的，内面的な魅力を重視する，とのことでした。このようなことからすると，正当にお互いを理解できるのでしょうか？　つまり，ここに表れていない，何らかの男女を結ぶ「基盤」を想定したくなります。それは何なのでしょうか？

恋愛から結婚に至る道のりは，単調ではないことは大方が同意するところだと思います。この過程においても男女の態度，行動のしかたは異なるようです。恋愛から結婚に至る過程におけるコミットメントの違い。つまり，女性は関係の深化に従ってコミットメントが増すのに対して，恋人前半期での男性の落ち込みは，何を意味するのでしょうか？　しかも，親密性，情熱性についても同様です。女性に対する期待の変化には何が作用しているのでしょう？　さまざまな男女差はどのようにして乗り越えられ，調和のとれた関係が築けるのでしょうか？　社会的な，そして，生物学的な背景を考えざるをえないのでしょうか？

〈長谷川眞理子先生へ〉

ヒト以外の「動物」から学ぶことの多いことを豊富な例を基にしてお話しいただきました。動物にみられる配偶者選択の「原理」は，確かに個体を超え，種の保存こそが最大の目標として働いていると受け取ることが可能かと思います。これまでの生物の歴史がそれを物語っていると解釈することは大方も肯定することと思われます。ヒトの配偶者選択に作用する重要な要因として，個人を超えた家族，血縁集団，世代，コミュニティ，さらに，流行などがある。それらが，個人レベルの好みを凌駕する基盤となっていることは，進化的視点から導き出されることが紹介されました。なお，「一夫多妻」のシステムは，繁殖力と資源の関係をヒトの種の保存も何ら他の動物と変わらない歴史的事実を示すものと考えられます。これらのことから，社会的な歴史性の一般性を理解できます。

そこで，心理学的関心からすると，人間には「独特な」要因として，個人的好み（個体差）が配偶者選択や恋愛行動の多様性を作っているといえるかと思います。確かに，それは一種の外れ値を意味することにもなるので，注目し，されやすいことから，実態以上に強調されることかもしれません。また，時代とともに，幼形への指向が増してきているようにも感じられます。根本的には，若さが魅力の重要な要因であることは首肯できますが，進化の歴史からすると，当然の推移とみなせるといえますでしょうか？

婚姻率の低下，出産数の低下などは，種の保存の観点からすると，矛盾するようにも思えます。先生のご指摘のように，somatic effort，mating effort，parenting effort の負荷のバランスが取れていないことが，若者の恋愛への慎重さにつながっていると考えるならば（それは，どうも否定できないと思いますが），ひとり若者だけの問題ではないといえるでしょう。よりマクロに検討すべき「社会」問題であろう，と肝に銘ずべきテーマではないかといえましょう。

総合司会（木村）：司会の大坊先生，シンポジストの各先生方，有難うございました。また，ご参加いただきました皆様方，長時間にわたり，ご清聴有難うございます。今回のシンポジウム，いかがでしたでしょうか。若者の恋愛観について再考する１つのヒントになれば幸いと考えております。

なお，皆様方にお願いがございます。入り口でお受け取りになりましたアンケート用紙へのご記入，よろしくお願いいたします。今後の参考にさせていただきますので，何かお気付きの点がございましたら，遠慮なくお書きください。用紙は受付に箱が置いてありますので，その中に入れてください。

では，以上をもちまして，公開シンポジウムを閉会とさせていただきます。本日はどうも有難うございました（拍手）。

■付記

当日は，お天気にも恵まれ，非常に暖かい日でした。しかも，テーマが“恋愛”だったこともあって，会場は若い人たちの熱気であふれました。「先着150名」の定員枠を設けていましたが，アンケートの回収だけで145名（男性79名，女性66名）いたので，実際は，200名近くの参加があったと思われ

ます。立見の人も出ました。それで，急遽，補助椅子を20脚ほどお借りすることになり，会場校の東京富士大学の浮谷先生にはご迷惑をお掛けし，申し訳ありませんでした。

昨年と同様，参加者のほとんどが非会員の一般学生・院生でした(94%)。公開シンポジウムの開催を知ったきっかけは，「所属機関での口コミ」が87%を占めていました。「関連学会のメールニュース」「ポスター，チラシ」「本学会のHP」は21名で，やはり30〜50代のほうが多かったようです。全体の感想としては，「現代の若者の恋愛傾向がよくわかった」「恋愛の進展における男女の違いが興味深かった」「進化論的にみた配偶者選びの話が面白かった」などの意見が圧倒的に多く，その意味では，今回の企画主旨である「応用心理学や進化生物学の知見が，若者の恋愛行動や恋愛スタイルの変化を，どのように説明できるか」という目的は，ある程度成功したのかなと思っております。一方，反省点としては，相変わらず「時間配分のまずさ」や「余裕のなさ」が指摘されており，「もっとじっくりと話が聴きたかった」という要望にどう応えていくか，今後の難しい課題です。これから取り上げてほしいテーマとしては，あらゆる領域のものが挙げられていたので，企画委員会の中でまた改めて検討していくつもりです。できるだけ時宜を得たテーマで，しかも，わかりやすく，多くの人が参加しやすい企画を立てることができれば，と願っています。会場については「駅から近くて非常に便利だ」という声が多く，また「受付のスタッフが親切だった」というおほめの言葉もありました（日体大の学生さんたちです)。

今回の公開シンポジウムが大盛況のうちに終わったのは，取り上げたテーマが若者向きだったことに加え，お願いした話題提供者の先生方や司会の大坊先生に大きなお力があったからだと思っております。また，森下理事長，常任理事，企画委員，会員の皆様のご協力があったればこそで，この紙面をお借りしまして，厚くお礼申し上げます。

（文責：田之内厚三）